

非認知スキル 向上プログラム

学校・家庭・地域で
子どもの夢を応援しよう



令和3年3月

香川県教育委員会

はじめに

変化が激しく予測困難な社会において、子どもたちが受け身ではなく、どんな状況でもあきらめず、課題を見出して解決していくためには、やり抜く力、自制心、自尊心、協調性、勤勉性、思いやりなど、自己実現の原動力である「非認知スキル」が求められています。一方、本県の子どもたちには、自尊意識等に課題があることが、全国学力・学習状況調査の結果から指摘されています。

また、近年の都市化や核家族化、少子化、地域におけるつながりの希薄化など、家庭を取り巻く環境が著しく変化している中で、地域から孤立しがちな家庭や、子どもとの接し方やしつけ方が分からないなど、子育てに不安や悩みを抱える保護者が増えています。

県教育委員会では、これまで、子どもたちが望ましい生活習慣や規範意識、道徳性などを身につける上で、家庭での教育はもとより、社会全体での支援が重要であることを啓発してまいりました。さらに、前述の自尊意識等の課題に取り組むため、平成29年度から「非認知スキル向上事業」をモデル校の幼稚園や小学校で実践し、この度、その成果をモデル校以外でも取り組めるよう、汎用的なプログラムとして取りまとめました。

本書を手引きとして、幼稚園、保育所、認定こども園、学校だけでなく家庭や地域においても、非認知スキル向上を目的としたさまざまな取組みが実践されることで、子どもたちのさらなる成長につながることを期待しています。

令和3年3月

香川県教育委員会

目次

第Ⅰ章 「非認知スキル」が子どもの「生きる力」をはぐくむ！

- 1 「非認知スキル」とは？ 1
- 2 なぜ非認知スキルが求められるのか？ 3
- 3 非認知スキル向上に向けた取組みを行うことで期待される効果 3

第Ⅱ章 非認知スキルを育てるための実践事例

- 1 幼稚園・保育所・認定こども園での取組み 4
 - (1) 家庭・地域との連携で「積極性・やり抜く力・自己有用感」等をはぐくむ！
 - 向上プログラム① 愛着形成のための『3つのかかわり』 5
 - 向上プログラム② 栽培活動での工夫 7
 - (2) 遊びの中で「やり抜く力・自制心・協調性」等をはぐくむ！
 - 向上プログラム③ 遊びこみへの工夫 11
 - (3) 生活習慣の定着を通して「意欲・協調性・思いやり」等をはぐくむ！
 - 向上プログラム④ 人からあいさつの大切さを学ぶ 19
- 2 小学校での取組み 24
 - (1) 特別活動で「思いやり・自己有用感・協調性」等をはぐくむ！
 - 向上プログラム① 異学年交流を取り入れた児童主体の活動 25
 - (2) 教科指導で「やり抜く力・意欲・自己効力感」等をはぐくむ！
 - 向上プログラム② 忘れ物を繰り返す児童への声かけ 33
 - 向上プログラム③ 努力している児童への声かけ 35
 - (3) 家庭・地域との連携で「やり抜く力・自己肯定感・意欲」等をはぐくむ！
 - 向上プログラム④ 保護者に声かけの例を示す 39
 - 向上プログラム⑤ 懇談会での保護者への伝え方 41

第Ⅲ章 専門家からのアドバイス

- 1 非認知能力：これからの社会に必要な資質 46
 - 香川大学医学部小児科 助教 鈴木裕美
- 2 「親子体幹遊び」のススメ 54
 - 独立行政法人教職員支援機構 つくば中央研修センター長 清國祐二
- 参考資料 —
- データからみえた子どもの非認知スキル 59

本冊子の構成

第Ⅰ章 「非認知スキル」が子どもの「生きる力」をはぐくむ！

「学力の向上」
をめざしたい！

「コミュニケーション能力」
を育てたい！

子どもの「やる気・
根気」を育てたい！

子どもにもっと「自信」
を持たせたい！



これらの実現には、「非認知スキル」がかかわっているのです！

第Ⅱ章 非認知スキルを育てるための実践事例

何度注意しても変わ
らない子どもが変
わっていくかわり
方とは？

子どものやる気を引き出す声
かけとは？

今日からすぐに実践できる？

学校での子どもたちへの
働きかけだけでなく、家
庭や地域での働きかけで
も変わる？



教育者としてのスキルアップに！

第Ⅲ章 専門家からのアドバイス

非認知能力はど
のように育てた
らいいの？



親子のかかわりを深め
る遊びが知りたい！



第I章 「非認知スキル」が子どもの「生きる力」をはぐくむ！

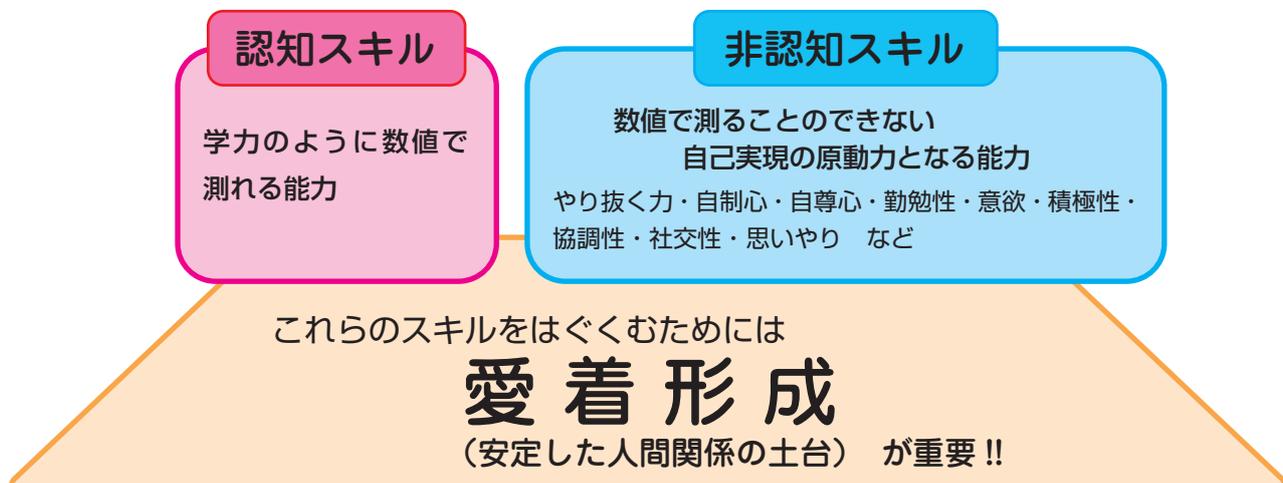
1 非認知スキルとは？

「非認知スキル」は、学力のように数値で測ることのできる「認知スキル」以外のあらゆる能力と定義され、人間が生きていくために大切な能力全般を指すものです。それは、1960年代からアメリカの経済学者ジェームズ・ヘックマン（2000年ノーベル経済学賞受賞）の研究をきっかけに重要性が広く知られるようになり、子どもの人生には学力に代表される認知スキルだけでなく非認知スキルが不可欠であることや、このスキルを伸ばすためには、幼児期からの教育環境が重要であることがエビデンスをもとに立証されてきました。

一方、1998年に改訂された学習指導要領では、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成が記載され、学校現場でも非認知スキルを伸ばす取組みが行われるようになりました。

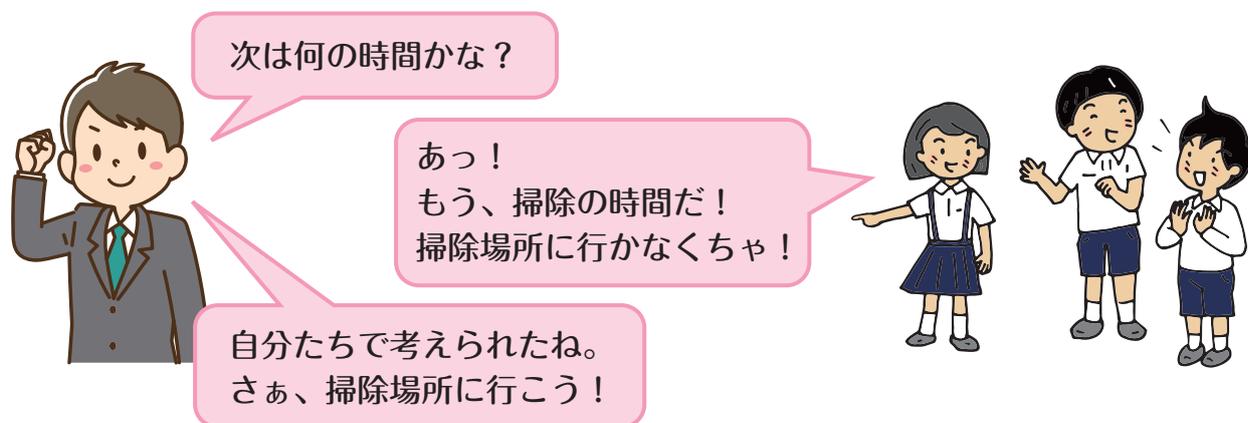
非認知スキルを伸ばすことができるのは、保護者や保育者、教職員など、日々子どもと接する大人たちや、切磋琢磨するなかまたちです。幼少期によく伸びるといわれる非認知スキルですが、かかわり方次第で、あらゆる成長過程において、はぐくんでいくことができる能力です。

また、非認知スキルをはぐくむうえで忘れてはならないのが「愛着形成」です。愛着が形成されることで、子どもはありのままの自分を認めてくれる安心感から心が安定し、それが土台となって健やかに成長し、さまざまな非認知スキルをはぐくまれるといわれています。



※ なお、「非認知スキル (non-cognitive skills)」と「非認知能力」は本書では同じものとして扱います。

例えば、掃除の時間になっているのに運動場で遊んでいたり、教室移動を忘れていたり、準備ができていなかったりして、なかなか次の行動に移せない子どもに対し、あなたはどの声をかけていますか？



「もう掃除の時間だよ！」や、「掃除場所に行きなさい！」という声かけでは、子どもはその場では指示に従いますが、自分で次の行動を考えようとしなくなります。子ども自身で考えるよう周囲の大人たちが働きかけ、できたことをしっかりほめることによって、子どもは状況を把握する力や計画性、自制心、協調性などの非認知スキルを育てることができるのです。

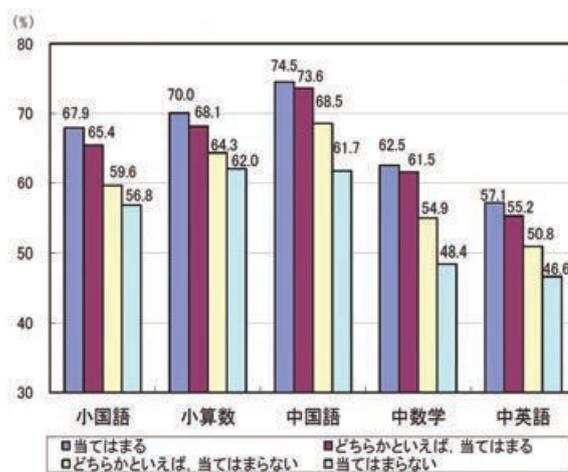
このように、子どもの非認知スキルをはぐくむチャンスは日常のあらゆる場面にあふれており、それをはぐくむためには、大人が子どもにどのようにかかわるのが重要になるのです。

『自己肯定感と平均正答率の関係から考える 非認知スキルと認知スキルの関係』

学力を伸ばすためには、「学ぼうとする意欲」や「積極性」、「自分で考える力」、「こつこつとやり抜く力」といった「非認知スキル」が必要です。つまり、学力などの「認知スキル」とは切っても切り離せない関係にあるのです。



※「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」に対して児童生徒が回答した選択肢別平均正答率



※全国学力・学習状況調査（令和元年度）より

2 なぜ非認知スキルが求められるのか？

先端技術の高度化や新型コロナウイルス感染症などにより、社会は大きく変化しており、現代は複雑で予測困難な時代となっています。これらの時代を生きる子どもたちが、予測できない変化に対して受け身ではなく、課題を見出し解決していくためには、他者と協働しながらやり遂げる力が必要となります。そのような力こそ「非認知スキル」であり、これからを生きる子どもたちにとって身につけておかなければならない重要な能力なのです。



3 非認知スキル向上に向けた取組みを行うことで期待される効果

モデル校において実践された先生方の話から、非認知スキルの向上に向けた取組みを行うことは、子どもの成長だけでなく、保護者、教職員、地域の方々にとっても、次のような効果が期待されることがうかがえます。



保護者に期待される効果

- 子どものよさや成長に目を向けられるようになったことで、より多くの喜びを感じ、前向きな子育てができるようになる。
- 愛着関係を築いていく方法を学び、自信を持って子どもと向き合える。
- 保育者との関係が深まる。

教職員に期待される効果

- 子どものことを理解し、具体的な対応スキルが身につく。
- 保護者との関係がよくなり、信頼関係ができる。
- 保育者や教職員の間でも前向きなコミュニケーションが増え、よりチーム力が高まる。

地域の方々に期待される効果

- 多くの人子どもや学校とかかわることでネットワークが広がり、地域の教育力向上につながる。
- 子どもや保護者が地域の人と顔見知りになり、日常的にあいさつや会話が増えるなど、地域コミュニティの活性化につながる。

第二章 非認知スキルを育てるための実践事例

1 幼稚園・保育所・認定こども園での取り組み

(1) 家庭・地域との連携で

「積極性・やり抜く力・自己有用感」等をはぐくむ！

向上プログラム① 愛着形成のための『3つのかかわり』

向上プログラム② 栽培活動での工夫

【主な事例】

- ・親子体幹遊び
- ・親子栽培活動



P5 へ

(2) 遊びの中で

「やり抜く力・自制心・協調性」等をはぐくむ！

向上プログラム③遊びこみへの工夫

【主な事例】

- ・ペア活動
- ・色水・石けん遊び
- ・ボディペイント
- ・サーキットづくり



P11 へ

(3) 生活習慣の定着を通して

「意欲・協調性・思いやり」等をはぐくむ！

向上プログラム④人からあいさつの大切さを学ぶ

【主な事例】

- ・あいさつ
- ・整理整頓
- ・食事



P19 へ

※注意※

ここに示しているプログラムやモデル園の事例は非認知スキル向上のための一つの方法です。これを参考に、各園所の実態や発達段階等に合わせた形で取り組んでください。

愛着形成のための「3つのかかわり」

ねらい

◇ 愛着形成のための『3つのかかわり』を通して、信頼感・安定感をはぐくむ。

保護者への配付物

家庭で『3つのかかわり』を実践するチャレンジ

保護者のみなさん、ご家庭で愛着形成のための『3つのかかわり』を意識して、一週間チャレンジしてみましょう。

愛してほしい

- ・言葉にして伝える
- ・笑顔でスキンシップ
- ・やさしい声で話しかける



大好きだよ。
おやすみなさい。

見てほしい

- ・手を止めて顔を見て話を聴く
- ・困ったときに手を差し伸べる
- ・できるまで、見守る



そうなんだ。
もっと教えて。

認めてほしい

- ・「したこと」を具体的にほめる
（「ありがとう、助かるよ」もほめ言葉）
- ・結果ではなく過程を認める

今日も食器の片付けをしてくれて助かるよ。



* 取組みに対する感想を、便りや掲示等で広めることも、より有効であると考えられます。

具体的な取組み

○保護者に対して

- ・活動の目的を、事前に周知する。
- ・家庭において、子どもが求める「愛してほしい」「見てほしい」「認めてほしい」という『3つのかかわり』を積極的に実践することを促す。
- ・取組みに対する感想を集め、便りや掲示等で広める。

ポイント

非認知スキルを向上させるには、まず安定した人間関係の土台（愛着の形成）が重要です。そのため、土台づくりの機会をできるだけ多く提供しましょう。

【保護者との信頼関係を構築するために】

保護者の気持ちに寄り添い、“話を聴く”姿勢を大切にしましょう。その時にも「愛してほしい」「見てほしい」「認めてほしい」という『3つのかかわり』が有効です。保育者と保護者の信頼関係が、子どものよりよい成長につながります。

◎愛してほしい◎

保護者は、笑顔で接してくれる保育者に対して安心感を抱くでしょう。また、保護者に対して積極的にあいさつしたり、声をかけたりするよう、心がけるといいですね。

◎見てほしい◎

保護者からの相談は、まず“聴く”ことが大切です。保護者は、不安な気持ちを誰かに聴いてもらうだけでも気持ちが楽になります。「何かあったら相談してください。」と伝えるなど、相談しやすい雰囲気を作りましょう。

◎認めてほしい◎

保護者は忙しい中、子どもの送迎や参観に来ています。そのような姿を当たり前と思わず、ねぎらいの言葉をかけることで、信頼関係を深めることができるでしょう。また、落ち着きがなく騒がしい子どもの保護者に「いつも元気でクラスの雰囲気を明るくしてくれて助かっています。」のように、保護者が短所と捉えている部分について見方を変えて伝えることも、保護者の不安な気持ちを楽にすることにつながるでしょう。

栽培活動での工夫

ねらい

- ◇「子どものやりたい」を引き出す工夫で、意欲・積極性をはぐくむ。
- ◇「子どものやりたい」を継続させる工夫で、やり抜く力をはぐくむ。
- ◇ 保護者に子どもの様子を伝えることで、愛着形成を促すとともに、自己肯定感・意欲・やり抜く力をはぐくむ。



話したい
聞いてもらいたい

「子どものやりたい」を引き出し それを継続させる工夫

(例)

- 何の花の種かあえて知らせない → 「知りたい！」
- 複数の種類を育てる → 「比べてみたい！」
- 目につきやすい場所に
プランターを置く → 「毎日見たい！」
- 花の絵本や図鑑、写真等を
意図的に配置する → 「もっと知りたい！」
- 地域の方との交流の
機会を持つ → 「もっとやりたい！」

愛着の形成

家庭での話題を提供



保育者

子どもの成長を
ほめるポイント



保護者

「気づいたことを友達に伝えるために、粘り強く何度も説明していましたよ。家庭でもほめてあげてください。」

「自分と友達の葉っぱの形や手触りの違いに気づいたんですよ。詳しくは本人から話を聞いてみてください。」

- ・こんなこともできるようになったんだ。がんばったことを本人からも聞いてみよう。
- ・以前に比べて、じっくり観察するようになってる！成長したな～。

まずは、保育者と保護者との信頼関係を築くことが大切です。
* P6のポイント【保護者との信頼関係を構築するために】を参考にしてください。

具体的な取組み

○子どもに対して

- ・「やりたい！」という気持ちを引き出す。
- ・「やりたい！」を継続させるため、適宜声をかけたり、見守ったりする。
- ・成長の様子を具体的かつ肯定的な言葉でほめる。
- ・一緒に活動し、喜びを共感する。

○保護者や地域の方に対して

- ・子どもの活動の様子を具体的に伝え、話題を提供する。
- ・子どもの成長を肯定的に伝え、子どもをほめるように促す。

ポイント

子どもたちが「○○したい」という気持ちを継続させるための場の工夫や声かけが重要です。さまざまな活動に主体的に取り組んでいる子どもたちの様子から、保護者や地域の方は子どもの成長を感じることができ、その子どもをほめることにつながります。

保護者に子どもの様子を具体的かつ肯定的に伝えることで、家庭での会話がより充実したものになるでしょう。

【前向きになれる声かけ（ポジティブシャワー）の例】

①前向きな成長思考

「今日は新しい発見ができたね。」

「どのように変わっていくか、楽しみだね。」

②努力の過程を認める

「毎日、お世話を続けていてすごい！」

「不思議なことを図鑑で調べているんだね。何か分かったら先生にも教えてね。」

③失敗から学ばせる

「どうすれば、次はうまくいくと思う？」

「失敗は、悪いことじゃないよ。」

④感謝を伝える

「道具を持ってきてくれてありがとう。助かったよ。」

非認知
スキル

自制心・やり抜く力

観音寺市立大野原幼稚園

※親子体幹遊び



・室内でできる簡単な運動を紹介したので、家庭での実践につながった。

・子どもは日頃体験しない動きをすることで、集中して取り組んだ。

- ・保護者から、「こんなに喜ぶ子どもを見たのは久しぶりだ」や「親子のふれあい遊びの目的や効果を認識し、以後、家庭でも実践するようになった」という感想が寄せられた。
- ・保護者は、体幹が鍛えられることのよさだけでなく、克服体験から自制心ややり抜く力が育つことに大変興味を持ち、感動していた。

留意したこと

- ・ふれあい遊びは、親子の愛着形成と、子どもの体幹を鍛えることに大きな効果があることを伝えた。
- ・子どもの発達段階にかなり差があるが、他の子どもと比べることなく、その子どもの進歩を見てもらった。
- ・親子体幹遊びで個々に取り組めるメニューとして「リズムジャンプ」を取り上げ、保育室や廊下で手軽にできるよう、場所や環境を整えた。また、楽しく取り組めるよう音楽を活用した。

※親子体幹遊びについて

親子体幹遊びは、親子の安定した愛着形成や非認知スキルの向上を目的とした取組みです。



「たっぷりスキンシップ 親子体幹遊び」の電子データはこちら！

URL <https://www.pref.kagawa.lg.jp/documents/14861/taikan.pdf>



非認知
スキル

自己有用感

高松市立一宮幼稚園

保護者・地域との栽培・飼育活動



・ 保護者とともに観察する。

・ 栽培したもので地域の方と交流

- ・ 長期的な取組みにおいて、意欲の連続性を大切にし、緻密な計画や目標、成果予想をもとに実践することで、子どものやり抜く力や思いやり、共感力等がはぐくまれていく手応えを感じることができた。
- ・ 安心して活動できる環境整備を工夫することで、子ども同士の共感ややり取りが生まれる。保護者や地域を巻き込むことで、気づき、主体性、コミュニケーション力を育成する機会となった。

留意したこと

- ・ 子どもが主役となる場面を作った。
- ・ 常にプランターを子どもの目に触れる場所に置いたり、身近に図鑑を置いたりして子どもの興味・関心が喚起される環境を作った。
- ・ 栽培記録や観察記録は、家庭で保護者と一緒に記録することとした。
- ・ 栽培や飼育など、長期的取組みの中で、節目の目標設定や評価を工夫し、保育者や保護者の十分なかかわりを確保した。

非認知
スキル

探究心・積極性

丸亀市立城辰幼稚園

親子栽培（夏・秋野菜）

長期的な展望に基づいた計画のもと、友達や保護者、保育者と共に栽培活動を楽しむ中で、自然の営みに触れることを通して豊かな感性（心の安定、成長の喜び、興味や関心の広がり）を育てる。



- ・ 親子で世話や収穫をし、家庭で料理をして味わう。
- ・ 親子栽培についてのアンケートの実施

- ・ 種から育てた秋野菜の栽培は、野菜の種の種類は知らせなかったもので、友達と双葉の形を見比べて予想したり、大きく成長した野菜について、友達、保護者、保育者に話したりしたことで、親子ともにより関心を持って観察していた。

留意したこと

- ・ 野菜に愛称をつけて名札を立てたり、水やりなどの環境を整えたりし、親子で関心や愛情を持って育てられるように工夫した。
- ・ 秋野菜の栽培では、夏野菜栽培の経験を生かし、親子でより興味や探究心を持って見たり育てたりできるよう、野菜の種類を知らせず、種の大きさや形、色などから子どもたちが自分で選び、種から育てる親子栽培を行った。その際、成長の不思議さや喜び、より深い気づきを共有できるよう、プランターを各保育室の前に置き、保育者が子どもや保護者に丁寧にかかわった。

遊びこみへの工夫

ねらい

- ◇ 遊びこむための支援をすることで、積極性・やり抜く力・協調性・信頼感・自制心をはぐくむ。
- ◇ 保護者に子どもの様子を伝えることで、愛着形成を促すとともに、自己肯定感・意欲・やり抜く力をはぐくむ。

子どもへの支援

- じっくり落ち着いて楽しむための時間の確保
- 個々の興味・関心に応じた活動・展開
- 子どもが必要を感じたときに指導
(ルールやきまり等)
- 育ち合いができる場づくり
- 子どもの要求に応じたさりげない準備・配置
- 保育者の励ましや見守る姿勢
- 保育者が一緒に遊び、喜びや悩みを共感 など

先生と遊ぶと楽しいね。



私も山を作りたいから、水くみ代わって。

水くみを順番にするとみんなが楽しく遊べるかもしれないね。

いいよ。順番にすればいいんじゃないかな。次は、ぼくが水をくんでくるよ。



順番に水をくみに行けばいいのよ。次はぼくが行こうかな。



保護者への支援

- 子どもの遊ぶ様子を具体的に伝える。
- 活動の様子が分かる写真や動画を活用する。



保育者

自分からコマを回せるようになっていきたいと言って練習しているんです。コマ回しは難しいから、今までだったら、すぐにあきらめていたと思うんですけど、一週間も練習を続けているんです。家庭でもほめてあげてください。



保護者

- ・難しいことにも挑戦するようになったんだな～。
- ・あきらめずに練習を続けているんだ。本人からも話を聞いてみよう。

具体的な取組み

○子どもに対して

- ・おもしろさを感じさせるとともに、遊びこむための時間の確保をする。
- ・個々の興味や関心を大切にする。
- ・継続して活動できるように声かけや見守りを行う。
- ・子どもと共に考え、共に喜ぶ姿勢を大切にする。
- ・結果だけでなく、努力の過程を認める。

○保護者や地域の方に対して

- ・子どもの遊ぶ様子や成長したことを具体的に伝え、子どもをほめるように促す。
- ・活動の様子が分かる写真や動画を用いて、より具体的に紹介する。

ポイント

子どもたちが遊ぶ目的は、遊びそのものであり、何か別の目的のために遊んでいるわけではありません。また、子どもは、その遊びを通して、非認知スキルを身につけていることから、子どもたちを遊びこませることで、非認知スキルのさらなる向上につながるでしょう。

幼児が、いろいろな遊びを心ゆくまで楽しみ、その中で物事をやり遂げようとする気持ちをもつことは、幼児の自立心を育む上で大切である。幼児は、幼稚園生活の中で様々な環境に触れ、興味や関心をもって関わり、いろいろな遊びを生み出す。この遊びを持続し発展させ、遊び込むことができれば、幼児は楽しさや達成感を味わい、次の活動に取り組んだ際にもやり遂げようとする気持ちをもつようになる。

(幼稚園教育要領解説 平成30年3月)

保育者の役割の中には、「幼児の気持ちを大切にし、幼児が自分なりに活動に取り組む中で達成感や喜びを感じられるよう支援していくこと」があります。喜びを共感してくれる保育者や保護者の姿が、幼児にとっての安心感や信頼感につながり、次の活動に取り組んだ際にも、やり遂げようとする意欲につながってくるのではないのでしょうか。

非認知
スキル

協調性・想像力・忍耐力

高松市立檀紙幼稚園

遊びの中の働きかけ



チャレンジカードの作成

- ・個々に目標を設定し、達成シールを貼ることで達成感を持たせ、取組みへの意欲化を図った。

おもちゃを通して

- ・ままごと遊びは、なりきりから、協調性や想像力、忍耐力を育てる。

- ・新しいことや難しいことに挑戦する子どもが増えた。
- ・集団遊びの中には、達成の過程にさまざまな葛藤や成功のチャンスがある。これを見逃さず、達成した時の声かけに生かすことで、自尊意識ややり抜く力の醸成に大きな効果があった。

留意したこと

- ・個々が目標に向かっていく姿を評価し、意欲化や継続化を図った。
- ・集団遊びにより、共有体験が積み重なるようにした。(嬉しさが2倍に、悔しさは半分)
- ・多くの育ちにつながるよう、順番やルール、相手への配慮などを意識して仕掛けた。ルールを守り、みんなが楽しく遊べる方法を考え、目標に向かって協力することの楽しさや集団で目標を達成する喜びを味わわせた。(個から集団への意識の広がり)

非認知
スキル

自制心・やり抜く力

観音寺市立大野原幼稚園

遊び・体験活動のブームをつくる



○子どもにブームをつくる

- ・積み木やブロック
- ・公園の崖登り、海岸の岩登り(園外保育)
- ・お祭りごっこ
- ・こま回し
- ・砂遊び
- ・栽培活動(夏野菜等)

- ・子どもは失敗や葛藤を克服することで、大きな達成感や満足感が得られた。
- ・多くの子どもが、一つのことに長期間集中して取り組めるようになった。

留意したこと

- ・集団での遊びや体験の中で、順番を待つことやルールを守ること、片付けることなどを仕掛けた。
- ・意欲が続き、最後までやり抜くことにつながられるよう、子どもがみずから始めたことや決めたことを大切にしました。
- ・意欲ややり抜く力を育てるため、家庭に遊びの意味や意図を伝え、協力を求めた。
- ・子どもの意欲ややり抜く力を向上させるため、一人ひとりの目的やクラス共通の目的をはっきり持たせ、視覚的な環境を整えた。

非認知
スキル

自尊感情・自制心・やり抜く力

高松市立一宮幼稚園

日々の活動を充実させる



【体幹づくり】

1日1時間以上の運動遊び時間を確保した。



【遊びや体験の充実】

登園後すぐ、思い思いに遊んだり、自分のしたい活動を楽しんだりする時間を設け、遊具等の環境も整えた。

- ・年少児にとって年長児がモデルとなり、遊びに広がりや深まりがみられるようになった。
- ・集団遊びでは、ルールの重要性に気づき、自分たちでルールを作っていく主体性へと発展がみられた。
- ・思いや考えを伝え合い、受容される経験を重ねることで、友達同士のやり取りが活発になってくる。その中で、目的の共通理解や役割分担を自分たちで行うようになり、結果として自己効力感・自己有用感の高まりがみられた。

留意したこと

- ・登園時の気分をリセットして、意識を遊びに向かわせるよう、必要な用具や教材を整理して取り出しやすい場所に置いた。（環境を整備）
- ・他者とのかわりを必要とする遊びを提示することで、協力・規範意識・自制心をはぐくむよう仕掛けた。
- ・友達と一緒に活動しながら、自分なりの思いやめあてを実現できるよう、かかわっていった。また、繰り返し取り組む姿ややり遂げようとする姿を認めることで、次の活動への意欲や自尊感情につなげた。

非認知
スキル

やり抜く力・積極性

高松市立檀紙幼稚園

体幹づくり



- ・一輪車を、いつでも利用できるような場所に置いた。
- ・友達ががんばっている様子を見ながら、自分もがんばろうと思える環境を作った。
- ・友達から、自然にアドバイスや称賛、励ましを受けられるような関係性を大切にした。



- ・保護者に親子で一緒に取り組むことの意義を説明し、子どもの表情や楽しむ様子を体感してもらった。

- ・一輪車や竹馬に乗れる子どもが短期間で大幅に増えた。
- ・子どもの中から「やったらできる！」という発言があり、自信を持って取り組めたことだと考えた。

留意したこと

- ・継続して活動できる環境をしっかりと整備するとともに、努力やチャレンジが楽しくなる仕掛けを工夫した。
- ・子どもの進歩や変容を注視する必要があった。意欲や満足感を継続させられるよう、昨日や前回より少しでも変化があれば、具体的にその努力をほめ、そのことを周りの子どもにも知らせ、共に喜び合った。

砂遊びは気持ちいいね（ペア活動）



年少児の活動の流れ

- ① 年長児の遊びを見る。
- ② 年長児と一緒に遊ぶ。
- ③ 年少児だけで遊ぶ。

保育者は、子どもが挑戦したことや自分で考えたことを称賛する。

- ・ 年少児は、ペアの年長児が砂場でダイナミックに楽しそうに遊んでいる様子を見て、一緒にさせてもらう場を持つことで、砂や水で遊ぶことへの期待が持て、汚れる・汚いという抵抗感が減った。
- ・ 年長児とのかかわりの後に、年少児だけで遊ぶ時間を設けたことで、やってみたいと思ったことにゆったりと取り組めた。保育者や友達と一緒に遊びを楽しみ、自分の思いを伝えたり、共感し合ったりすることができた。

留意したこと

- ・ 入園して間もない年少児に様々な体験を通して、興味・関心に合わせて遊ぶ楽しさを感じられるよう、モデルとなる年長児とペアで遊びの体験を行った。
- ・ 子どもが好きな砂や泥、水の感触を味わうことができる遊びを設定した。
- ・ 年少児がペアの年長児の活動を見てから、体験する流れで活動を組んだ。
- ・ 保育者は、子どもが新たに取り組んだことなどを具体的に認めた。

大丈夫、やってみよう！ ～主体的に遊びに取り組む中で～

遊びの中で自転車や雲梯ができるようになりたいと、自分なりの目標に向かって取り組む子どもの気持ちを支えながら、認められる喜びや安心感、自分を信じてやってみようとする気持ちが持てるような援助に努める。

ありがとう。
ちょっと練習
してみるね。



前を見て乗るといいよ。
がんばって！

- ・ 保育者が「自分の力だけでやりたい。がんばっている自分を見てほしい。」という子どもの思いを受け止め、かかわることで、子どものやる気が高まった。
- ・ 自分なりの目標に向かう気持ちを認め、支えている保育者だけでなく、憧れの存在であり励ましてくれる友達や驚いたりほめたりして認めてくれる保護者等、身近な人との温かい関係性の中で子どもの自己肯定感や意欲が育っていくことを感じた。

留意したこと

- ・ 子どもの活動している様子から、がんばっている過程を認めた。
- ・ 友達がかけてくれる励ましの言葉がより伝わるように少し言葉を添えたり、同じようにがんばろうとしている友達の姿を知らせたりした。
- ・ 保育者は、保護者に子どもの取り組んでいることや、成長について具体的に伝え、保護者にも子どもを具体的にほめるよう促した。

非認知
スキル

好奇心・意欲・粘り強さ

丸亀市立城辰幼稚園

おもしろそうだな！やってみよう！もう1回挑戦！
～色水・石けん遊びを通して～



長期的な栽培計画のもと、子どもたちと共にさまざまな種類の草花を育て、色水遊びを繰り返して楽しむようにする。

色水作り、泡、クリーム、シャボン玉作りを組み合わせる中で、色の出方やクリームの硬さなど、さまざまな発見をしたり試したりしながら楽しむ。

- ・長期間花が咲いていたことから、繰り返し取り組むことができ、どの花から何色の色水ができるのか、組み合わせるとどうなるのか、水以外のものにも色がつくのかなど、「好奇心→意欲→探究心→満足感」または「失敗経験→もう一回やってみよう」とする意欲につながっていった。

留意したこと

- ・子どもたちが色が出る草花への関心が高められるよう、植えから活動を始めた。
- ・自分たちで色水作りに使える花を探し採れるよう、手に取りやすい場所に植えたりプランターを移動させたりした。
- ・給食で食べたオレンジの皮や保育者が用意したレモンなど、さまざまなものでも試せるよう、子どもたちの要求に応じて準備したり、さりげなく置いたりした。

非認知
スキル

興味・関心

高松市立檀紙幼稚園

ボディペイント



- ・自分のイメージを膨らませながら保育者や友達と遊ぶことを楽しむ。
- ・保育者や友達のしていることを見て、自分もやってみようという気持ちを持ち、やってみることで手応えを感じる。

- ・保育者は、五感を使った感覚的な遊びが苦手な子どもに配慮し、無理をせず、その子なりの参加の仕方や楽しみ方を認めることで、遊んでみようとするきっかけになった。
- ・最初は、どうしていいのか分からなかった子どもも、活動経験を積み重ねてきたことや、年長児や周囲の姿に刺激を受けて、自分から絵の具に触れてみようとする姿が見られた。

留意したこと

- ・五感を使った感覚的な遊びに安心して取り組めるように、保育者が遊び方を見せたり一緒に行ったりした。また、じっくり落ち着いて楽しめるように、時間や場所の確保を行った。
- ・保育者や友達に、自分なりに感じたことや気づいたことを表現できるように、友達の思いを聞く場や発表できる機会を設けた。
- ・開放感を味わえるように、園庭に保育机を配置して、そこに絵の具を広げておいた。また、上から布を吊るしておき、絵の具を手や体に付けて自由に描けるようにした。

体幹遊び サーキットをしよう



活動の流れ

- ①一人ひとりがコースを作る。
- ②生活グループでコースを作る。
- ③異年齢交流をする。

- ・子どもたちは、自分たちで作ったコースで繰り返し遊びを楽しんだ。コースの改善点を考えながら、次のコース作りに生かそうとする姿が見られた。

- ・「一人では運べない、友達と力を合わせたら運べる」ような遊びの場を設けることが、協調性、社交性につながっていった。
- ・異年齢交流を継続的に行う中で、思いやりの気持ちや自制心を育てるきっかけになった。

留意したこと

- ・子どもたちで準備しやすいよう、取りやすい場所に道具を配置した。
- ・保育者は、子どもたちの「こうしたい」という思いに寄り添いながら、友達同士で伝え合えるように橋渡しをした。
- ・協力せざるをえない状況を作るため、グループ活動を行った。
- ・異年齢交流を繰り返し行うことで、相手の立場に立った行動を促した。
- ・自分が使いたい積み木を集め、一人で自分の思うコースを作ろうとする子もいたので、友達と一つのものを作ることを経験してほしいと願い、クラス活動でサーキット遊びを取り入れた。

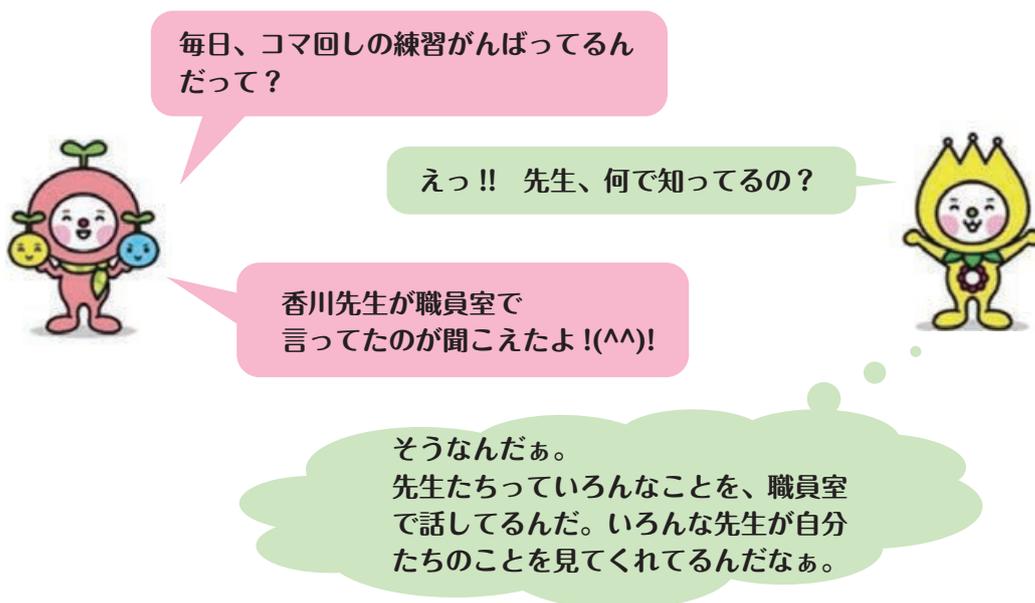
ちょっとひと息

同じほめ言葉でも、第三者の言葉として伝えられると嬉しいことってありませんか？

人は、直接利害関係がない第三者による情報を信頼する傾向があります。間接的にほめることで信頼され、それを言ってくれた第三者にも、伝えてくれた人にも好感が生まれる効果があるそうです。

子どもたちをしっかりと見て、職員室での世間話で子どもたちのよいところを伝え合うのはいかがでしょう。

ただし、話に花が咲きすぎて…には注意！



人からあいさつの大切さを学ぶ

ねらい

- ◇ 子どもがあいさつする様子を広げることで、自己有用感・協調性・意欲をはぐくむ。
- ◇ 保育者があいさつする様子を広げることで、思いやり・意欲をはぐくむ。

子どもから広げる

先生、おはようございます。

おはようございます。Aさんからあいさつしてくれて、先生うれしかったわ。

ぼくのあいさつで、先生が喜んでくれた。

Aさんのあいさつで先生がにこにこしてる。わたしも先にあいさつしてみよう。

先生、おはようございます。

おはようございます。Bさんは笑顔であいさつしてくれて、先生も元気になるわ。

先生、おはようございます。

ぼくもAさん、Bさんのようなあいさつをやってみよう。

先にあいさつするのがいいんだ。

Aさん、Bさんすごいね。私もやってみよう。

私も笑顔で話しかけられるとうれしくなるなあ。

A児

B児

保育者 A

保育者から広げる

A先生、大丈夫ですか。ドア開けますね！

B先生ありがとう。助かります！

A先生、笑顔になってる。うれしいんだなあ。

B先生やさしいな。人を助けるなんてすごいな。

B先生も、ありがとうって言われて笑顔になってる。

保育者 A

荷物を持ってドアが開けられない

保育者 B

それを見てドアを開ける

具体的な取組み

○子どもに対して

- ・ほめる際には、何がどうよいのかを具体的に伝える。
- ・それぞれの子どものよいところを、周りの友達にも伝える。
- ・常に、子どものモデルとなっていることを意識する。

○保護者や地域の方に対して

- ・子どもの様子や成長を肯定的かつ具体的に伝え、子どもをほめるように促す。

ポイント

子どもは、保育者のことをよく見て、そこからさまざまなことを学んでいます。保育者同士が日常的にあいさつし合う姿やほめ合う姿を、意図的に子どもたちに見せることが大切です。

大人たちにとっても、日常の行動や言動を見直すよいきっかけとしていきましょう。

生活に必要な習慣の形成の第一歩は、家庭において行われる。幼稚園は、それぞれの家庭で幼児が獲得した生活上の習慣を教師や他の幼児と共に生活する中で、社会的にも広がりのあるものとして再構成し、身に付けていく場である。

・・・・・・・・中略・・・・・・・・

また、基本的な生活習慣の形成に当たっては、幼稚園生活の流れの中で、幼児が一つの生活行動の意味を確認し、必要感をもって行うようにすることが大切である。

(幼稚園教育要領解説 平成30年3月)

子どもが、気づき、考えられるように支援することで、自立心や自律性なども育っていきます。



非認知
スキル

協調性・自制心・思いやり・自尊心

観音寺市立大野原幼稚園

生活習慣定着の取組みの中で

- ①「ありがとうと言うこと」
 - ・まず、保護者を巻き込んで朝のあいさつ「おはようございます」の習慣化を図った。
 - ・次に素敵な笑顔で「ありがとう」を交わす幼稚園をめざした。
- ②「靴を揃えること」
 - ・園全体で取り組み、段階（個々の目標）を設定して達成経験を積み重ねた。



- ・あいさつや靴の取組みなどを習慣化したことにより、波及して他のこともできるようになった。
- ・小さな成功体験と的確な称賛により、子どもに自尊感情や自制心が育った。
- ・アンケートによると、7割の保護者が1学期に比べて2学期はよく「ありがとう」を言うようになったと回答した。

留意したこと

- ・保育者対保育者で「ありがとう」を言う場面づくりを心がけた。
- ・学期ごとに実施するアンケートで、子どもの成長や保護者の意識の変容を調査し、保護者と共有した。
- ・園長だより等に称賛場を紹介するなど、保護者に対しても取組みの浸透を図った。
- ・「園独自のほめ方ポイント」を作成し全職員で共通理解を図るとともに、毎月の園集会で、すべての子どもにスポットをあてて、ほめる場面を作った。

非認知
スキル

やり抜く力・自制心

高松市立一宮幼稚園

あいさつ・食事・排泄・清掃

個に応じた目標設定や、保護者啓発による園との同一步調で、スモールステップを積み重ね、手応えや成功体験を積み上げた。



- ・親子で栽培した野菜を調理して食べる機会を設け、共に食べる喜びを体感させた。

- ・一つできるようになることで、他の活動にも自信を持って臨むようになった。
- ・一人ひとりの育ちの違いを踏まえて、長期的に見通しを持ったかわりをし、意欲を認め、小さな一歩を積み重ねたことで、自己肯定感の向上につながった。
- ・具体的に評価することで、意欲化が図られ活動が発展した。
- ・保護者と情報を共有しながらすすめたことで、保護者の自己肯定感や子育てへの意欲が向上している。

留意したこと

- 【あいさつ】
保育者の共通理解により園全体で声を出しやすい雰囲気を作った。
- 【食事】
個々の目標設定と、保護者との情報共有を大切にし、食べきれ分量の弁当から始め、徐々に種類や量を増やし食べる喜びを共有した。
- 【排泄】
保護者の考えや子どもの状況に応じてスモールステップで無理なく取り組めるよう工夫した。
- 【清掃】
的確な指示と作業しやすい環境づくりに努め、活動を地域へと拡大した。

あいさつ・整頓・清掃



【あいさつ】

友達に進んで自分からあいさつができる雰囲気作りを行った。

【整頓】

園の日常生活の中に、整頓タイムを組み込み、行動の中でルーティン化を図った。行動の節目毎に自分の身の周りに気を配る時間を確保し習慣化した。新しく購入したおもちゃを提示し、片付け場所を決めるなど整頓の意識を育てた。

【清掃（雑巾がけ）】

全園児が、自分の雑巾を持って実施することで、集団的満足感や心地よい成果を共有した。

- ・ほとんどの子どもが、抵抗なくみずから声を出してあいさつできるようになった。保護者のあいさつが増え、子どもの手本となっている。あいさつや清掃に保護者の意識の変容がみられた。
- ・整頓を通し、物を大切にすることが、人を大切にする姿勢につながり、意欲や自己有用感の醸成に効果がみられた。

留意したこと

- ・あいさつをされた時の気持ちを、子どもたちにその都度伝えた。あわせて毎朝、保育室に入ってから、自他のあいさつを振り返る時間を作った。
- ・保護者にもあいさつの協力を依頼し手本とした。
- ・子どもへの指示は、具体的にひとつずつ行い、完結させてから次に進むよう職員の共通理解を図った。
- ・終わってからの達成感や満足感をじっくり味わわせた。自身の努力や工夫を振り返り、保護者を巻き込んだ多方面からの評価を心がけた。

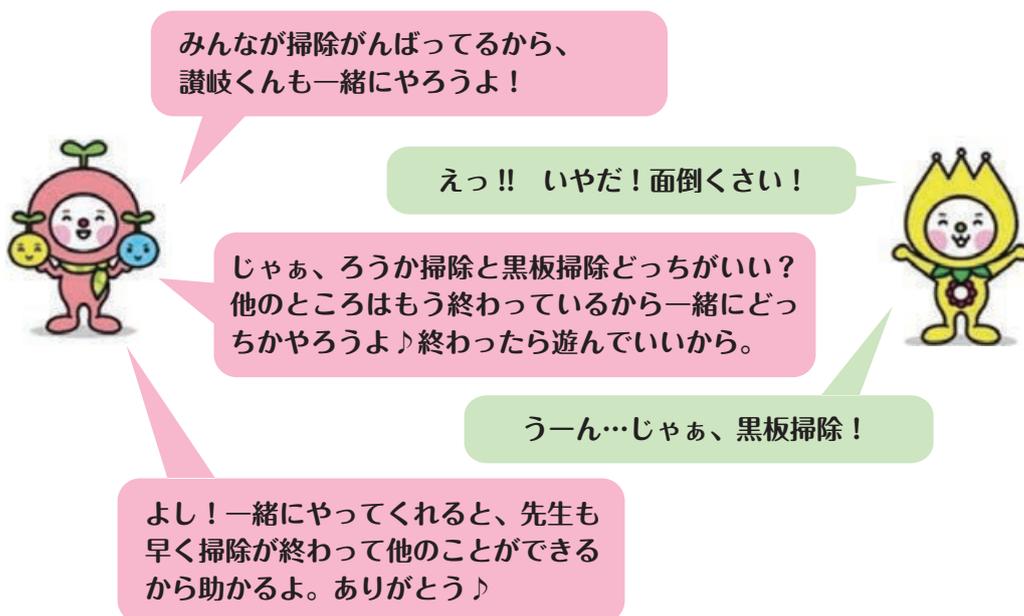
ちょっとひと息

子どもに自分で考えさせてもなかなか考えがまとまらないとき、選択肢の提示の仕方的判断をコントロールする方法があります。

「取り組まない」という選択肢がない2つの選択を提示して、子どもが少しでもやってみる、やらざるを得ない状況を作ることができます。

ただし、選択肢を多くしないことが大切です。人は、選択肢の多い状況を求める一方で、選択肢が多くなるほど実際に選択した結果への満足度が低くなることも最近の研究で明らかになっています。

子どもが悩んで決断したことを応援し、実行に移せたらしっかりほめて、子どもの自己肯定感を高める！そのためにも先生方の選択肢提示の技を磨きたいですね。



2 小学校での取り組み

(1) 特別活動で

「思いやり・自己有用感・協調性」等をはぐくむ！

向上プログラム① 異学年交流を取り入れた児童主体の活動

【主な事例】

- ・ ペアや縦割りグループ活動
- ・ 異学年交流学習
- ・ あいさつ運動
- ・ ボランティア活動
- ・ 清掃活動
- ・ 児童同士の相互評価



P25 へ

(2) 教科指導で

「やり抜く力・意欲・自己効力感」等をはぐくむ！

向上プログラム② 忘れ物を繰り返す児童への声かけ

向上プログラム③ 努力している児童への声かけ

【主な事例】

- ・ 学び合いを取り入れた授業
- ・ 自己指導能力を高める授業
- ・ 子育て5原則を意識した授業



P33 へ

(3) 家庭・地域との連携で

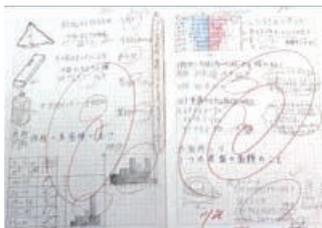
「やり抜く力・自己肯定感・意欲」等をはぐくむ！

向上プログラム④ 保護者に声かけの例を示す

向上プログラム⑤ 懇談会での保護者への伝え方

【主な事例】

- ・ 長期休業中のワークシートチェック
- ・ 自主学習の取り組み
- ・ 親子アート
- ・ 地域交流
- ・ 体験活動



P39 へ

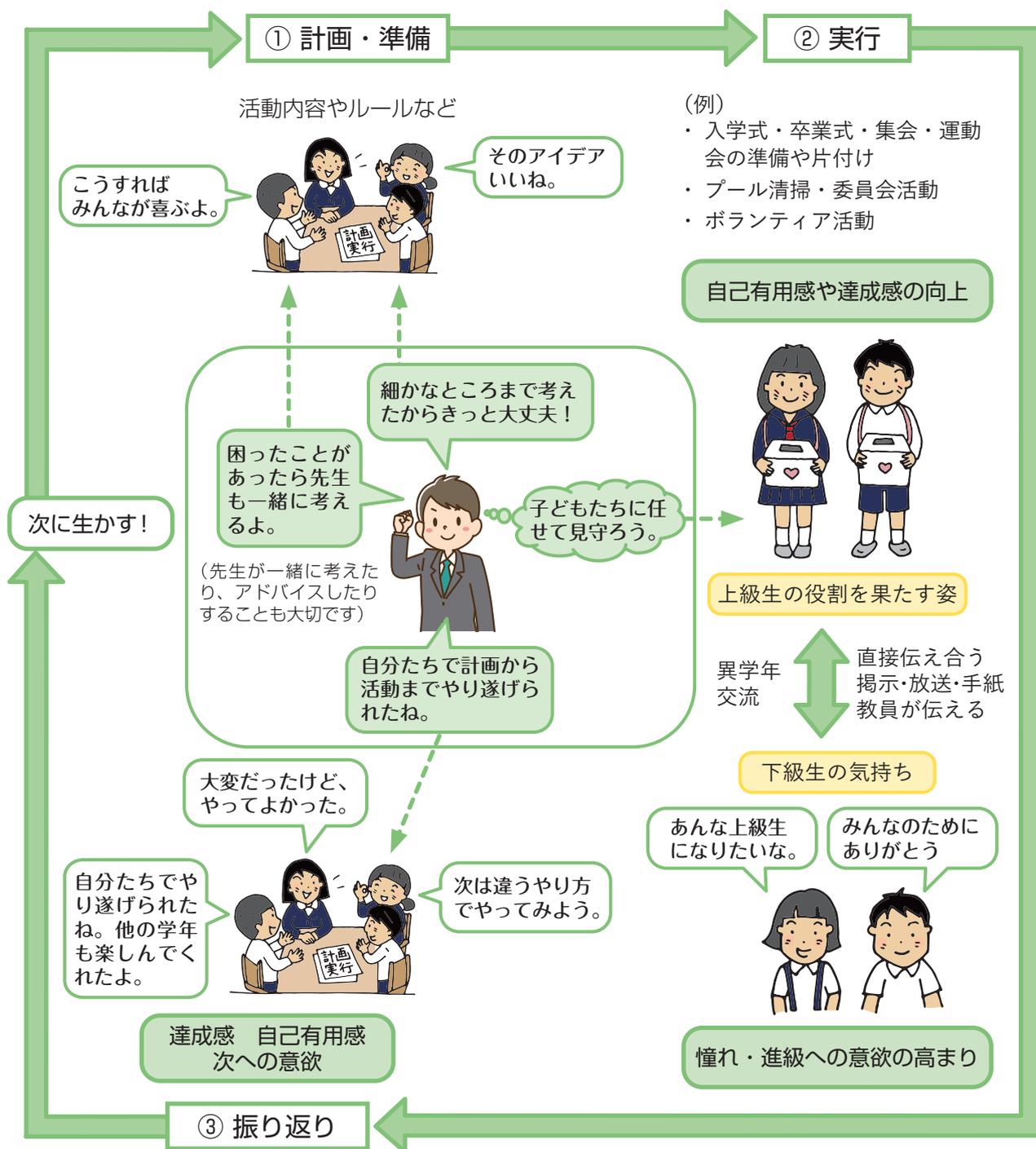
※注意※

ここに示しているプログラムやモデル校の事例は非認知スキル向上のための一つの方法です。これを参考に、各学校や学級の実態等に合わせた形で取り組んでください。

異学年交流を取り入れた児童主体の活動

ねらい

- ◇ 児童主体の活動で、達成感・自己有用感・協調性・意欲をはぐくむ。
- ◇ 教員の働きかけで、やり抜く力・自己有用感をはぐくむ。
- ◇ 異学年交流で、自己有用感・達成感・思いやり・協調性・意欲をはぐくむ。



具体的な取組み

○児童に対して

- ・ 教員が、いつでも相談に乗れる体制を整えておく。
- ・ 活動計画について話し合う時間を十分に確保する。
- ・ やる気を継続させるため、計画や準備の段階でも、努力していることや成長している点を具体的にほめる。
- ・ 活動後も、努力した過程を具体的にほめ、達成感につなげる。
- ・ 活動の振り返りから出た課題を次に生かすよう促す。
- ・ 上級生の活動のやりがいや意欲につなげるため、上級生が学校のために行っている活動を全校生に掲示や放送等で知らせる。
- ・ 上級生の達成感や自己有用感を高めるため、下級生の感謝の気持ちを手紙や放送等で伝える。

ポイント

児童がみずから考え、実行することで、より達成感が得られます。最初は時間がかかったり、うまくいかなかったりすることもあります。教員は児童に任せ、最後まで見守りましょう。

子どもたちの自己有用感を高める要素

自分たちでやり遂げた
という自信や達成感

教職員からの
支援・称賛・感謝

友達からの称賛・感謝



異学年からの
憧れ・称賛・感謝

保護者からの称賛・感謝

地域の方からの称賛・感謝

上級生は下級生から感謝されたり憧れられたりすることで、下級生は上級生からほめられることで、自己有用感が高まります。

みんなのために活動している児童の姿を紹介することも有効な手立てです。

非認知
スキル

思いやり

高松市立一宮小学校

ペア・縦割りグループ活動

～なかよし活動で高める思いやりの心～

活動の意味づけや途中経過を大切にし、子どもたち自身が主体的に取り組む活動とした。(1学期はペア活動、2学期以降は縦割りグループ活動)

	顔合わせ
6月	ペア遊び
	グループで次回の計画を立てる
7月	小ユニットでの遊び
9月	縦割り遊び
11月	縦割り遊び
12月	振り返り
2月	ありがとうの会準備



子どもたち同士がつながることが最大の目的

- ・お互いに分からないことを質問し合う環境づくりにより、支え合う安心感がみられた。
- ・教員が十分に準備を行い実践したことで、子どもの自己効力感・自己有用感の高まりがみられた。

留意したこと

- ・事前指導を大切にし、目的や意義を十分に伝えた。終了後は、学年の目標と評価、問題点や成果について振り返りカードを用いて適宜確認した。
- ・子どもが自己選択・自己決定できるような配慮をした。
- ・教員が目的や役割分担を明確にしたうえで、必要な支援や仕掛けを十分に協議した。

非認知
スキル

自尊心・自己効力感

三豊市立比地大小学校

児童会・縦割り活動



朝の体力づくり、昼休みのなかよし遊び、上級生による読み聞かせ、5月の運動会、7月の水泳大会、12月のマラソン大会、2月の縄跳び大会等を行った。



縦割り班活動を行った結果、普段の学校生活でも、異学年での交流が見られるようになった。

- ・トラブルが起こることもあったが、上級生が仲裁に入る姿や、上級生の助言を素直に聞き入れる下級生の様子が見られるようになり、全体的にトラブルが減少した。
- ・上級生は頼られ慕われる経験が自信となり、下級生は大切にされる安心感から班に所属する喜びや満足感を感じる場となった。

留意したこと

- ・児童が班活動の目的を共有し、協調性や一体感を育てよう班旗を制作した。
- ・6年生全員が、個々に得意な活動のリーダーとして活躍できるよう、多様な活動の場を設定した。
- ・毎回活動後に振り返りの時間を設け、低学年から順に気持ちを伝え合うことで、自分の言動がもたらす影響や効果を認識させるとともに、次の活動への意欲化と、班としての愛着形成を図った。

非認知
スキル

自尊心・自己有用感

三豊市立本山小学校

異学年交流学習



〈異学年交流学習〉

異学年交流活動を通して、自他のよさや価値を考え、他者に貢献できる充実感や感謝の心、自己有用感の向上を図る。

月に1回15分間設定した。1年と4年、2年と5年、3年と6年のペア学年をつくり、下学年が算数の問題を解き、上学年が解き方を教えたり、丸付けをしたりする。上学年は事前に問題を解いておき、教え方を考えておく。また、活動後に振り返りの時間を取り、お互いのよさを伝え合う。

- ・ 下学年、上学年ともに、時間が足りなくなるほどの集中力をみせた。
- ・ 下学年は意欲化が図られ、上学年はやりがいを感じる場となった。
- ・ 他の全校活動でも、がんばりやよさを紹介し認め合う場面が増えた。(相乗効果)

留意したこと

- ・ 異学年の相手に分かってもらうための工夫や、気持ちを思いやる姿勢を持つことが自然に実践できた。また、うまくいくまで何度も試行錯誤を繰り返すことが苦痛ではなく楽しみになるよう仕掛けた。(1対1効果)
- ・ 下学年児童の感謝や変容が、上学年児童のやり抜く力の原動力となるため、毎回成果を発表する場面を設定した。
- ・ 下学年の児童に自分を重ね、自身の成長を振り返ることができるよう助言した。

非認知
スキル

自己有用感

三豊市立本山小学校

「思い合う子」の育成 継続した「なかよし班活動」



- ・ 出合いの集会(4月)
- ・ なかよし班遊び(毎月第1火曜日)(6年生中心に内容を検討する)
- ・ 人権週間での活動(期間中は毎週火曜日に活動する)
- ・ 6年生を送る会(なかよし班を中心とした活動に変え、次年度のリーダーである5年生が班の考えをまとめた)

- ・ なかよし班活動を継続することで、上級生はみずからの役割を果たし、達成感を得ることができた。また、下級生は、困ったことや分からないことをどんどん聞くことができ、上級生を慕っている姿が見られた。よい上下関係が形成された。
- ・ 異学年での活動を積極的に取り入れたことで、自分の役割や立ち位置が明確になり、多くの児童が自己有用感や達成感を味わうことができた。

留意したこと

- ・ 児童の主体的な活動を重視した取組みを行っている。その中で核となる児童会活動の活性化の一つとして、なかよし班活動を充実させた。1年間を通して、意識や活動が継続するように、教師はサポート役としてかかわった。
- ・ 活動も昨年通りではなく、児童の思いをしっかりと受け止めながら、形を変えていくことを非とせず計画立案を進めた。
- ・ 3学期には5年生にもリーダーとしての自覚を促す役割を任せた。

縦割り『色別活動』
～異学年集団活動で、はぐくむ信頼関係～



全児童を4チームに分け、体育行事を中心に色別対抗形式で活動し、年間で順位をつける。5・6年生がリーダーとなり、活動前にはミーティングをする時間を設定する。

- ・色別活動で互いに顔見知りとなり、自然と学年の枠を越えて遊びのグループができた。サッカーやドッジボールでは、上級生が下級生にルールや技を教える姿が見られた。また、なわとび台では自分たちで順番を決めて、和やかな雰囲気練習できた。
- ・本校では集団登校、集団下校を行っていないが、登下校時に自然と集団ができるようになり、保護者からも「上級生が下級生の面倒をみってくれるので、安心できる。」といった声が聞かれるようになった。

留意したこと

- ・チーム編成は、春休み中に行い、担任が学級の児童を4つに分けた後、きょうだい関係に配慮しながら、担当者が全学年を組み合わせた。児童間トラブルが起きないように、最終調整は全教員で念入りに行った。
- ・運動会の応援合戦についての活動では、リーダーのミーティングに最も長い時間を費やした。台詞や隊形、役割分担などすべてを児童が決めた。
- ・なわとびの練習に年間を通して取り組めるよう、運動場のなわとび台を増やした。

6年生の「ボランティア清掃活動」



6年生が中心となって、校門付近、ピオトープ、畑の除草等を行っている。下級生は、6年生の働いている姿を見ながら登校する。ボランティア清掃の取組みは5年生以下にも広がっている。

- ・6年生の活動を見せることにより、下級生に勤勉性が受け継がれている。
- ・6年生は下級生から憧れの存在となり、清掃を通して最高学年の自覚が芽生え、そのことが自尊心の醸成につながっている。

留意したこと

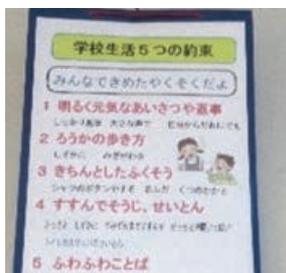
- ・自主的な行動となるような仕掛けや評価の工夫を行った。(自尊心の醸成)
- ・伝統を大切にしつつ、発展させていけるよう、他学年にその姿を見せるとともに、学校便りで校内外へ紹介している。
- ・下級生は「先輩から学ぶ場」、上級生は「やさしく下級生を導く場」の集大成として取り組んでいる。

非認知
スキル

自制心・やり抜く力・自主性

三豊市立比地大小学校

あいさつ・清掃活動



「学校生活5つの約束」
代表委員会で話し合っ
て決めた児童の主体的
な取組みのひとつ
である。

「清掃指導」
上級生と下級生がペア
になり、学校前道路、
歩道橋、JR比地大
駅付近、公衆トイレ
を清掃した。

- ・ 主体的な取組みで、学級全体の雰囲気よくなることを実感し、成就感や自己有用感を味わった。成功体験が好循環を生んだ。
- ・ 上級生にほめられた下級生は、自信を持った。上級生は、下級生の目標となり自己有用感と高い規範意識を持つことにつながった。清掃ボランティアは、毎回希望者が多く、抽選となるほどの意識の高まりが見られた。

留意したこと

- ・ 児童が目的や方法を決め、児童の自主性や主体性を尊重した。
- ・ 異学年の協働により、上級生の責任感や自己有用感を高める機会とした。
- ・ 校外清掃ボランティアは、児童の自主性を尊重して、定員制とし参加を募った。
- ・ 清掃活動を地域に発信することで、多方面からの評価を受け、自主性や自己有用感、達成感を味わせた。認められほめられる循環づくりを意識した。

非認知
スキル

自己有用感・自己効力感

高松市立一宮小学校

気持ちのよい1日スタート！あいさつUP大作戦



気持ちのよいあいさつについてクラスで話し合い共通理解した。

クラスで話し合い共通理解したことを、すぐに実践につなげた。

- ・ 学年ごとに工夫した意欲的な取組みが見られた。自分たちで判断して行動したことが認められることで、指示を待っていた児童が徐々に自分から行動できるようになった。
- ・ 具体的な言葉で称賛されたり、相手も笑顔であいさつを返してくれたりする体験を通して、あいさつの効果や必要性、大切さを実感し、自己有用感、自己効力感の高まりにつなげることができた。

留意したこと

- ・ プラスの言葉「～しよう」を使った。
- ・ 全児童で気持ちのよいあいさつとはどんなあいさつかを考えた。
- ・ 自分のあいさつ目標を決めた。(小目標⇒中目標⇒大目標へ)
- ・ 自分のあいさつを自己評価した。
- ・ 評価カードを渡すときは、よいところを具体的に示し、具体的な言葉で称賛するよう共通理解を図った。
- ・ 3回目は通学路に立っている地域の方や保護者にも協力を依頼して評価カードを渡してもらった。

児童会『やさしさの木』
～相互評価で高める思いやりの心～



児童会主体の
「やさしさの木」コーナー

- ① 思いやりのある行動に気づいた児童が、児童名と内容をカードに記入して児童会ポストに投函する。
- ② 児童会役員が、給食時の放送で全校生にカードの内容を紹介した後、「やさしさの木」に貼るというもので、児童の相互評価として定着した。

- ・ 以前は、下級生が上級生に感謝を伝える内容で占められていたが、上級生が下級生の努力を讃える内容も見られるようになった。
- ・ 学校便りで何度も取り上げたことで、保護者の認知度が高まり、学習参観日や期末懇談会のときには、立ち止まって「やさしさの木」を眺めている。自分の子どもやなかのよい児童のカードを探して、熱心に読む姿も見られた。家庭で話題になったり、子どもをほめる材料になったりする効果がみられた。

留意したこと

- ・ 「やさしさの木」は、児童玄関近くの全児童が毎日通る廊下の壁面に設置した。
- ・ 児童会役員が、年度初めの全校集会で「やさしさの木」の意味と活用の仕方を説明し、その後も定期的にカードの記入例を放送で知らせている。
- ・ 保護者に知らせるために、学校便り5月号で新しい「やさしさの木」掲示板を紹介した。さらに、学校便り12月号では「やさしさの木」の写真を掲載し、多くのカードが貼られていることを知らせた。

「鍛え合う子」の育成
～ともに高め合い力をつける活動を通して～



オリンピック・パラリンピックに関連した教育を実践した。
「ナガオリンピック」
「ロケットマン大会」「ミニハードル大会」「ボッチャ大会」
「自主学习ノートコンクール」

- ・ 自分の得意なことに、進んで挑戦しようとする児童が増えた。また、苦手なことでも今よりよくなろうと努力する姿も多く見られた。達成感を得て、やり抜く力も向上してきた。
- ・ パラリンピックの種目（ボッチャ、ブラインドサッカー、ゴールボールなど）を取り入れることで、障がい者についての理解が進むとともに、認め合うことや支え合うことの大切さを感じることができていた。思い合う心や協調性が高まってきたと考える。

留意したこと

- ・ クラスの団結力を生み、協調性を高められるよう、クラスマッチを定期的に行った。
- ・ クラスマッチは、全員が参加してクラスのためにがんばるという意識を持たせるため、個人種目と学級(全体)種目の両方を必ず設定して、個人の伸びやがんばりを認められるようにした。
- ・ 競争するという側面もあるが、オリンピック精神の「参加することに意義がある」を合い言葉に、児童会が自分の興味・関心に応じて、自分で種目を選び、より多くの児童が積極的に参加できるように呼びかけた。

** ちょっとひと息 **

失敗談から

教員として6年間の経験、しかも、3校目の赴任。
少し、いや、だいぶ自信を持ち5年担任としてスタートした3日目のできごと。

掃除の時間、私は教室で子どもたちと一緒に掃除をしていた。
ある男の子がほうきで床をはいている姿を見て、
「それでは時間がかかるから、前から後ろにはいて。」
と伝え、様子をうかがっていたが、はき方を変えない。
何度かやり取りを繰り返すうちに
「だから、何回も言ったよね。このように掃いて！」
と、ほうきを取り上げ実際にやって見せた。
その時・・・
男の子が泣き出した。
(何で???自分は効率のよい方法を指導しただけなのに・・・)
「何で泣くの?」と聞いても
「・・・。」

掃除が終わって、
もう一度聞くと、その子は一言
「自分なりに考えて掃除をしていたのに・・・。」

児童に大切なことを教えてもらった、7年目のスタートだった。



忘れ物を繰り返す児童への声かけ

ねらい

- ◇ Ask (児童に問う) の声かけで、意欲・安心感をはぐくむ。
- ◇ Say (児童が言う) の声かけで、意欲・やり抜く力をはぐくむ。
- ◇ Do (児童がする) の声かけで、自己効力感・忍耐力をはぐくむ。

忘れ物を繰り返す児童に対して
こんな声かけはどうでしょう？

① Ask (児童に問う)

忘れ物をしたら活動ができなくて困るね。
どうすれば忘れずに持ってくることができるかな？
(一緒に考えてみようか？)

責めずに、改善策
を考えさせる！

教員

② Say (児童が言う)

その方法でやってみるんだね。
がんばっていいね！

方法を受け入れる！

③ Do (児童がする)

すごい！自分で考えた方法で、忘れなかったんだね。
明日もがんばろうね。

できたらほめる！

それでも忘れたら・・・① Ask にもどる。
できなくても繰り返し行い、できたときには、
しっかりほめる！

* Ask・Say・Do の考え方は、さまざまな場面で応用ができます。
一度でできなくても粘り強く働きかけましょう。

具体的な取組み

○児童に対して

- ・ 日常的な声かけを見直す。
- ・ 問題行動だけでなく、その背景を理解するように努める。
- ・ 改善策を考えられない場合は、一緒に考える。
- ・ 児童が考えた方法は、共感的に受け止める。
- ・ 少しでも改善が見られたら具体的にほめ、次への意欲につなげる。
- ・ Do でうまくいかなかったも、もう一度 Ask に戻り、取組みを繰り返す。
- ・ すぐに結果を求めず、粘り強く指導する。
- ・ Ask ・ Say ・ Do の考え方を、さまざまな場面で活用するように意識する。

ポイント

忘れ物を繰り返す児童に、「また忘れたの?」「なぜ忘れるの?」ではなく、考え方を变えて、児童が改善策を考え、実行することができるように働きかけることが大切です。できなくても繰り返し働きかけましょう。少しでも成長が見られたときには、具体的にほめることが次への意欲につながります。

【こんな時こそ指導を変えるチャンス!】

何度指導しても同じことを繰り返す児童に、こんな声かけはどうでしょう?

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| 「何でできないの?」 | → 「どうすればできるようになると思う?」 |
| 「前も言ったよね?」 | → 「もう一度説明するね。」 |
| 「なぜ言われた通りにできないの!」 | → 「どうしてこのようにしたか教えて?」 |

努力している児童への声かけ

ねらい

- ◇ 今していることを認めることで、意欲・やり抜く力をはぐくむ。
- ◇ 挑戦したことやその過程を認めることで、自己効力感・意欲・やり抜く力・忍耐力をはぐくむ。

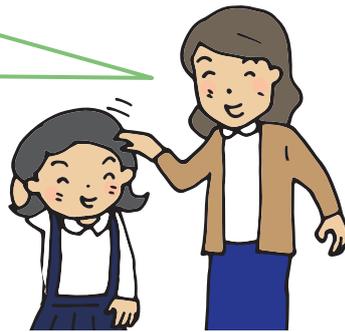
こんなとき、どのように声をかけますか？

①努力しているとき

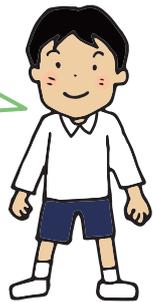
今やっていることを認める！

今日も練習がんばっているんだね。いつも見ているよ。自分が決めたことをやり遂げようとするのはすばらしいね。

A 児



A さんはずっと練習がんばってるよね。ぼくも練習してみよう！



②努力してきたことへの結果が出たとき (よい結果が伴わないときも)

挑戦したことや過程を認め、次への意欲を！

まず、挑戦したことがすごいね！しかも、続けることは簡単じゃないのに、よくここまでがんばったね。

あきらめずにやり続けたことが、すごいことなんだよ。やり続ける力を次にも生かしてね。

B さんの努力する姿は先生しっかり見ていたよ。ここまでやり遂げられたことに価値があるから、これからもがんばってね。応援しているよ。



B 児

具体的な取組み

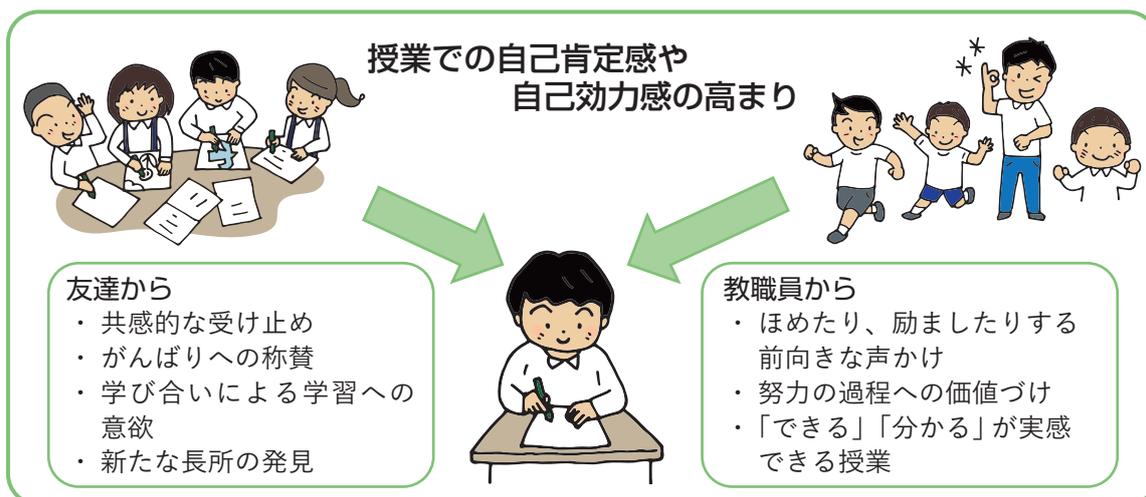
○児童に対して

- ・ 日常的な声かけを見直す。
- ・ 努力している過程を認め、次への意欲につなげる。
- ・ 前向きな成長思考を促す声かけをする。
- ・ 努力してきたことへの結果がよくても悪くても、挑戦したことや努力した過程を認め、次への意欲につなげる。

ポイント

教員は、結果だけに着目した声かけをするのではなく、児童が努力する過程を大切に考えるように促す声かけをしましょう。

「練習がんばってるね」→「今日も練習がんばってるね」のように、継続して見守っていることが分かる声かけができるようにしたいですね。評価する時には、結果だけでなく、取組みや努力した過程などに着目し、児童の次への意欲につなげることが最も重要です。



学校生活の大半の時間を割く授業の中で、児童一人ひとりの長所を生かしたり、伸びやがんばりを実感したりする場を設け、自己肯定感や自己効力感の高まりに結びつけることが大切です。また、児童自身が実感した自分の成長や自分のよさを友達や教職員から認められることで、大きな自信になるでしょう。

非認知
スキル

やり抜く力・学習意欲の向上

さめき市立長尾小学校

子育て5原則を意識した授業 ～基礎基本の定着と学びがときめく指導をめざして～

「子育ての5原則」(鈴木裕美氏による)の視点を授業に生かして実践を試みた。この5原則は、授業のみならず日頃の児童とのかかわりにおいても意識して生かすべきであると考え、授業以外の場でも実践した。

- ① 安全・安心して過ごせる環境作り「笑顔で大丈夫と言おう」
- ② 積極的に学べる環境作り「子どもの関心ごとに関心を持つ」
- ③ 一貫した分かりやすいしつけ「ルールはシンプルに具体的に」
- ④ 現実的な期待感を持つ「成長したことに注目しよう」
- ⑤ 親としての自分を大切にす「気持ちに余裕があればうまくいく」



- ・ほめる、励ますといった、教師からのプラスの声かけが多くなった。同時に、児童一人ひとりのよさを見つめることができてきた。
- ・学習内容の基礎基本の定着、学習規律の確立、学習意欲の育成で、「できる子」「わかる子」「がんばる子」が育ってきた。自分自身に自信を持って取り組むことができるようになった。

留意したこと

- ・教師の支援活動として、積極的な声かけや、気になる児童への個別のかかわりを意図的に行った。その際には、鈴木先生の「子育ての5原則」を意識して行うようにした。
- ・家庭学習パワーアップ週間は、児童会の主催する取り組みであることを前面に出した。前年度からの取り組みで浸透はしているが、児童がやらされている感を持たないように、十分配慮した。また、保護者が児童とのかかわりを持つよい機会であるため、保護者の協力を得て連携した取り組みを行った。

非認知
スキル

自己効力感・自己有用感

高松市立一宮小学校

学び合いによって自己有用感が 高まる授業を探る実践

友達・グループタイム

私は、〇〇から□□と考えたんだけど、どう思う？



私も同じように考えたよ。

いい考えだと思うよ。△△も加えると、もっとよくなるんじゃないかな。

- ・「自分の力だけでやりたい。がんばっている自分を見てほしい。」という子どもの思いを受け止め、かかわる教員の存在は子どもにとって大きいものであった。
- ・自分なりの目標に向かう気持ちを認め、支えている教員だけでなく、憧れの存在であり励ましてくれる友達、驚いたりほめたりして認めてくれる保護者等、身近な人との温かい関係性の中で自己肯定感や意欲が育っていくことを感じた。

留意したこと

- ・子どもの活動している様子から、がんばっている過程を認めた。
- ・友達がかけてくれる励ましの言葉がより伝わるように少し言葉を添えたり、同じようにがんばろうとしている友達の姿を知らせたりした。
- ・教員は、保護者に子どもの取り組んでいることや、成長について具体的に伝え、保護者にも子どもを具体的に称賛するよう促した。

「自己指導能力」を高める授業実践



自己決定の場

子どもが選択した課題について、その解決策を見通しを立てたうえで考えさせる。学習を振り返り自己評価を行い、その成果を明確にするとともに、新たな課題の設定につなげる。

自己存在感を与える場

課題解決の過程で、自分の果たす役割を自覚する。教員の発問や対話の活性化により思考を広げ深める。

共感的人間関係を育成する場

課題解決の過程で他との関係を意識する。相互評価を行い、自己理解、他者理解を深める。発言や考えを組織化・構造化し、板書と連動したノート指導を行う。

- ・ 全校で統一した取組みや、教員の共通理解により系統的で緻密な指導ができた。
- ・ ホワイトボード（グループ）の活用で、話し合う内容が整理され、一生懸命に交流しようとする姿が見られた。

留意したこと

- ・ 「深く考え、みずから解決したくなる課題」「集団で解決する必要がある課題」を設定した。
- ・ 自己決定・自己理解・他者理解・自己有用感・共感・振り返りの流れを重視し、その過程を大切にした指導を意識した。
- ・ 家庭と連携した自主勉強ノートの取組みで、家庭学習の習慣化を図った。年間300ページの目標設定と「継続性」「ていねいさ」「集中力」「工夫」の4観点についての自己評価と教員の評価（称賛）を工夫した。

保護者に声かけの例を示す

ねらい

◇ ポジティブシャワー（子どもが前向きになれる声かけ）で、やり抜く力・意欲・自制心・協調性をはぐくむ！

◇ 愛着形成のための『3つのかかわり』を通して、信頼感・安心感をはぐくむ。

* 詳しくはP5をご覧ください。

保護者への配付物

「ポジティブシャワー」で子どもの力をアップ!!

保護者の皆様へ

- ・子どもの「前向きな成長思考」を育てるために、がんばったことを認めましょう。
- ・子どもの行動については、結果よりも努力の過程に着目するようにしましょう。
- ・子どもの成長は他の子と比べず、その子自身の成長を認めていきましょう。

ポジティブシャワーの言葉例

やり抜く力

こつこつ、～できてるね。
前回よりも〇〇の取り組み方がよくなったね。
進んで～できたね。

意欲・積極性

～にチャレンジしたんだ。すごいね。
自分でやりたいことを見つけて取り組めたね。

自制心

計画的に、～に取り組めたね。
遊ぶ前に、やるべきことを終わらせたんだね。

協調性や思いやり

一緒に掃除をしてくれて、助かったよ。
妹のために、絵本を読んでくれて、ありがとう。

* 愛着形成のための『3つのかかわり』をご参考に！

愛着形成のための『3つのかかわり』

この3つを満たすと
信頼感と安心感が
はぐくまれます！



わが家のポジティブシャワーの紹介

これまでは言われてから行動していたけど、今回は進んで取り組むことが多くなり、成長を感じました。これからもがんばってね。(3年)

1か月前は、2回しかできなかった二重跳びが10回もできるようになったのは、寒い中毎日練習した成果だと思えます。努力できるあなたがすごいです。(5年)

具体的な取組み

○保護者・地域の方に対して

- ・ 保護者と子どもの愛着形成の重要性について、年度初めの懇談会等で説明する。
- ・ 家庭での実践につながるよう、便りや参観日の掲示等で紹介する。その際、より効果的な取組みとなるよう、事前に目的や内容等を知らせる。
- ・ 声かけの参考となるよう、はぐくみたい力ごとに分けて、声かけで使える言葉の例を提示する。
- ・ 家庭での実践に関する好事例（わが家のポジティブシャワー）を紹介することで、意欲化と実践化を図る。
- ・ 保護者はもとより、地域の方と活動する際も、事前に協力を求め、共通理解を図ることによって、より効果的な活動となるように促す。

ポイント

家庭教育の自主性を十分尊重したうえで、目的や方法を分かりやすく丁寧に伝え、家庭での実践を促しましょう。また、学校が家庭や地域と連携・協働し、子どもたちの個性を肯定的な視点で見たり、前向きになれる声かけを積極的に行ったりすることで、子どもを中心とした信頼関係の構築にもつながることが期待されます。

○児童に対して

学級活動や道徳の時間を活用し、「言われてうれくなる言葉」等に関する学習を並行して行うことにより、このプログラムとの相乗効果が期待できます。

懇談会での保護者への伝え方

ねらい

- ◇ 具体的・描写的に伝えることで、自己肯定感をはぐくむ。
- ◇ 努力の過程を伝えることで、やり抜く力をはぐくむ。
- ◇ 見方を変えることで、自己肯定感をはぐくむ。
- ◇ 前向きな成長を促すことで、意欲・やり抜く力をはぐくむ。

懇談会の充実度は、教員の伝え方次第！

* 以下の伝え方を参考に、先生一人ひとりが考えて、児童の成長につながる懇談会にしましょう。

ほめるとき

◎具体的、描写的に！

4月頃から比べると、漢字ドリルでの取組みが丁寧になってきており、物事をやり遂げる力が育ってきましたね。

◎結果だけでなく努力の過程を！

まだ、本人の目標である25mは泳げていませんが、練習をがんばっています。友達の泳ぎ方をよく見て、練習時間いっぱい泳いでいます。努力する力が育ってきています。努力していることをご家庭でもほめてあげてください。

◎見方を変える！

活動のスピードはゆっくりかもしれませんが、それは丁寧に取り組んでいるからです。

◎家庭での姿を聞いて！

ご家庭でも、毎日お風呂掃除のお手伝いをしているんですね。毎日感謝の気持ちを伝えてあげると、きっと喜ぶますよ。



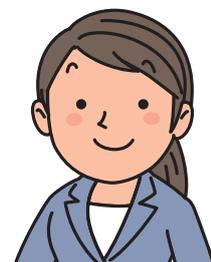
改善点を伝えるとき

◎前向きな成長を促す！

「これを、どのようにすれば、どのようによくなる」と具体的な伝え方をして、次の行動につなげられるようにしましょう。

優しい言葉で友達に話かけると、自分の気持ちが正確に伝わり、友達との関係がさらによくなりますよ。

算数の計算問題では、解いた後に見直す習慣がつくと、ミスが減り、次のやる気につながりますよ。



具体的な取組み

○保護者に対して

- ・ 家庭で児童をほめるヒントとなるよう、具体的に成長したことを伝える。
- ・ 改善点を伝える際には、具体的な改善方法を提案し、児童の成長につなげる。

ポイント

家庭訪問や個人懇談会などは、教員が保護者と直接話す貴重な機会です。その機会を有効に活用するためにも、何をどのように伝えるか準備をしておきましょう。教員が日頃の様子を肯定的かつ具体的に伝えられるよう工夫することで、保護者も懇談会に参加しやすくなり、家庭での前向きな話し合いにつながるでしょう。

◎ 懇談会における保護者への伝え方について、教員同士で話し合うことで、児童理解や懇談スキルの向上につながります。また、話し合った内容は家庭訪問や学びの便り作成の際にも役立てることができます。

◎ ほめる材料を増やすために、日頃から児童へのアンテナを高く張り、観察や記録をする習慣を身につけておきましょう。また、多くの教員で子どもにかかわり、情報交換をすることで、新たな一面を発見できるでしょう。

非認知
スキル

やり抜く力・学習意欲

三豊市立桑山小学校

長期休業中のワークチェックシート

保護者の励ましコメント



児童の記入項目は、自主勉教の頁数、毎日の自己評価など、一日一日の積み重ねに着目できる内容とした。

保護者コメント

「毎日計画を立ててしっかり勉強できたね。この調子で3学期もがんばろう！」など、前向きなコメントが増えた。

留意したこと

- ・保護者に子どものことを知ってもらう機会を提供するため、長期休業の宿題にコメントを書いてもらった。
- ・保護者に、やり抜く力をサポートする声かけやコメントの記載を依頼し、学校便り等で過程を称賛した保護者コメントを紹介した。
- ・子どもに成功体験を積み重ねるために、教員や保護者の日常的な言葉かけに気を付けた。

- ・冬休みの「チェックシート」では保護者の励ましの言葉に「こつこつ」が非常に多く見られたことから、効果的な声かけについて、保護者への働きかけが大切であると感じた。

非認知
スキル

自制心・やり抜く力

三豊市立桑山小学校

自主学習ノートを使った実践



「どんどんノート」学習の習慣化をめざし、1日1ページを目標とした。

質的な向上を図るため「どんどんノート」の展覧会を実施した。

留意したこと

- ・取組みを習慣化する仕掛けを工夫した。
- ・保護者の協力を得るために、学年に応じた取組み方を紹介する「どんどん勉強の手引き」を作成した。
- ・毎日の小目標を達成する経験の蓄積で「やり抜く力」の育成につなげた。

- ・「どんどんノート」の取組みは通年であり、子どもにとって先の見えない大目標となっているため、保護者も努力を見続ける必要がある。習慣化の過程で、自制心・学習意欲・やり抜く力をはぐくむ取組みとして効果的であった。
- ・個人では継続できないことも、全体で取り組み、励まし合ったり、競い合ったりすることで、自制心ややり抜く力を効果的に育成することができた。また、学校全体で日課を調整するなどの工夫を行った。

非認知
スキル

思いやり・自尊心

善通寺市立東部小学校

ファミリーアート ～共同作業で深める親子の絆～



【親子で作ったうちわ】

夏休み作品展で、作品と保護者の評価カードを掲示した。

【感謝の花束の展示】

児童のメッセージを添えて保護者にプレゼントした。

- ・親子活動を通じて、子どもの成長を感じられたため、どの活動も保護者に好評であった。
- ・子どもから保護者に花束を贈るのは、新鮮であったようだ。全校生分を体育館に展示して、保護者に公開することで、子どもたちの素直さやあたたかさに気づいてもらうことができた。

留意したこと

- ・夏休みに家庭で親子の交流機会を増やす目的で親子で取り組む課題を出し、作品タイトルに加えて、だれと一緒に作ったかを記すようにした。保護者には、子どもの成長を見つけ評価するよう依頼した。
- ・保護者の負担を最小限にしつつ、保護者を巻き込んだ取り組みを行うことで、親子の話題や子どもの成長を知る機会を保護者に提供した。
- ・保護者に活動の目的や内容を伝えるとともに、子どもとのかかわり方や声かけなどのモデルを示した。

非認知
スキル

自尊心・社会性

三豊市立本山小学校

本山寺ふれあい活動



毎年5、6、10月に全校生徒で本山寺を訪れ、お接待（手作りのしおりのプレゼント、あめや飲み物の提供）や清掃活動を行った。前年度の経験を生かし、参拝者に喜んでもらうためにはどんなことが

できるかをテーマに、活動の企画を児童主体で考えた。

今年度は異学年でペアを作り、活動内容や訪問日を協議し、ペア学年がなかよくなるための活動についても考えた。

- ・参拝者の方と言葉を交わしたり、感謝の言葉をいただいたりすることが、児童の行動に価値づけすることとなった。
- ・他者（お遍路さんや地域）からの評価が、活動意欲や活動価値を高め、自尊心や自己有用感の向上につながった。

留意したこと

- ・異学年でペアを組み、活動中に起こる小さな問題を、子どもたちみずからの工夫や対応で乗り越えられるよう見守った。
- ・お遍路さんと直接言葉を交わし交流することを大切にしたい。自分の言動が相手にどのように伝わるか考えたり、相手に喜んでもらうための自分の言動を、客観的に振り返ったりした。
- ・コミュニケーションやおもてなしの心について考えを深めるとともに、人の役に立つ喜びを味わう場とした。

地域交流・体験活動

地域学習を核にした生活科・総合的な学習の時間の充実



- 1年：「しぜんとなかよし」
- 2年：「はっけんあるあるたんけんたい」
- 3年：「ふるさと比地大のじまん」
- 4年：「アサギマダラをよぼう」
- 5年：「弁天よろず市・実るん田」
- 6年：「比地大を安心・安全すみよい町にしよう」

児童は、地域の方からふるさとについて教えてもらい、よさに気づくことができました。

- ・自分が地域の一員である誇りを持つとともに、自分たちも地域のために貢献しようとする意欲を持つことができた。
- ・地域を「知る・関わる・つながる」体験が、さらなる主体的な学びにつながった。
- ・地域の方々との交流が活発になり、自分たちは地域の方々からの愛情に守られていることや生活が多くの方々を支えられていることを学ぶことができた。

留意したこと

- ・地域学習を通じて、地域への誇りを持つことができるよう、地域のよさに着目するよう心がけた。
- ・地域の「学校愛」に感謝し、それにどう応えるか考えるよう促した。
- ・児童の「気づく・感じる」を重視した。
- ・直接地域の方々と接することでコミュニケーション能力の向上を図った。
- ・「本物」にふれることで「あこがれ」や「目標」意識を持たせた。

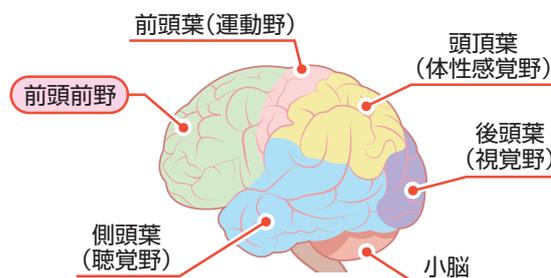
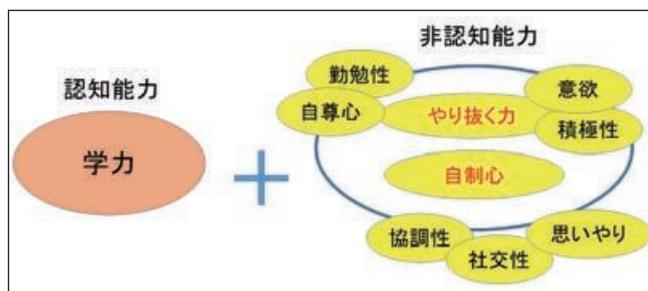
第三章 専門家からのアドバイス

1 非認知能力：これからの社会に必要な資質

香川大学医学部小児科 助教 鈴木裕美

(1) 非認知能力とは…

能力には、学力などの「認知能力」とそれ以外の能力である「非認知能力」があります。非認知能力とは、人間が生きていくために大切な能力で、自己実現の原動力となるものです。下の図のように意欲や積極性、やり抜く力、自制心など目には見えない、数値で測ることが難しい能力のことを示します。



非認知能力は、脳全体の3割を占める前頭前野に存在し、保護者からの適切なかかわりによって安定した愛着が形成されると、2～3歳くらいから発達しはじめるとされています。つまり、幼少期に生まれた非認知能力は、周りの人とのかかわりによってはぐくまれ、大人になっても発達し続ける能力なのです。

(2) 非認知能力が育つための準備

① 子どもとの安定した愛着を形成することで非認知能力の土台が築かれる

非認知能力を育てるには、保護者からの適切なかかわりによって形成される「安定した愛着（保護者と子どもの絆）」が必要です。また、保育者や教職員も子どもに効果的な指導をしていくためには、一人ひとりの子どもと適切な人間関係（愛着）を形成することが重要です。

安定した愛着は子どもが望む3つのことを満たすことで形成されます。「愛してほしい（愛情）」「見てほしい、聞いてほしい、分かってほしい、困ったら手を差し伸べてほしい（関心）」「認めてほしい（前向きな注目）」の3つです。これらが満たされて、子どもは安心感と信頼感を得ることができ、それが非認知能力を育てるための土台となるのです。



「愛情」……………スキンシップや笑顔、やさしい声かけなどで表現することができます。保護者同様、保育者や教職員にとっても子どもと愛着を形成する上で最も大切なことです。

「関心」……………短時間でよいので目を見て話を聞くことです。子どもは目を見て話を聞いてもらうことで、自分に関心を持って聞いてもらっている、この人を信じて頼ってもいいと感じます。

「前向きな注目」…過去の子ども自身と比べ、できるようになったことに注目し、それを言葉にして認めることです。子どもの成長過程を見て正しく評価することで、子どもの自己肯定感などを高めることができます。

子どもは、自分に「愛情」「関心」「前向きな注目」を与える人と愛着を形成し、安心感と信頼感を持つことができます。それができて初めて、その人の話を聞き、言葉を受け入れられるようになり、集団生活の中で積極的に遊び、探索し、学び、ルールを守りながら自主的に行動することができるようになるのです。

② 興味・関心を育てる

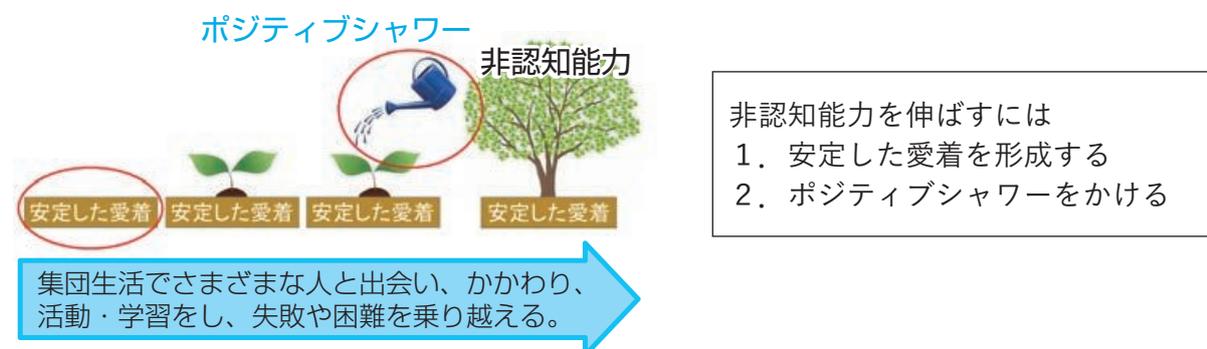
安定した土台を持った子どもは、さまざまなことに好奇心を持ち、「もっと知りたい」「自分でやってみたい」と意欲的になります。そのようなとき、大人から「くだらない」「危ないからやめておきなさい」「そんな暇があるなら勉強しなさい」などの否定的なことを言われたり、大人が不機嫌になったり無視したりすると、子どもの膨らみかけた好奇心はしぼんでしまいます。大人は子どもが興味を示したことに関心を持ち、「面白そうだね」と一緒に楽しんでみるのが大切です。なぜなら、芽生えた好奇心を応援して伸ばすことは、将来の目標に繋がり、夢をかなえる原動力になるからです。

(3) 非認知能力が育つメカニズム

非認知能力は前頭前野に存在し、安定した愛着形成の後2～3歳くらいから発達すると述べました。日常の中でできることが一つずつ増えたり、達成感や幸福感を味わったりすることで、前頭前野が活性化します。そのとき、脳の中央から前頭前野に向かってドーパミンが放出されることで子どもは喜びを感じるのです。その喜びを再び得るための行動を繰り返すことにより、ドーパミンが何度も放出されます。それにより脳の報酬神経回路が強化され、前頭前野にある非認知能力が育つのです。

重要なことは、次の図に示すように子どもの安定した愛着の上に芽生える非認知能力に前向

きな声かけ（ポジティブシャワー）を行い、ドーパミンをたくさん放出させることです。例えば、子どもが自主的に遊びを考え、それに没頭することを楽しみ、かつ周囲の大人から励まされたり、ほめられたりすると、たくさんのドーパミンが前頭前野に放出され、そこにある「積極性」や「自主性」、「創造力」といった非認知能力が発達するということです。



(4) 非認知能力を育てよう

① 前向きな成長思考とは…

物事に対する考え方は次のように「前向きな成長思考」と「後ろ向きな硬直思考」の2つがあります。非認知能力を伸ばすには、子どもが前向きな成長思考を持つことが大切です。なぜなら、前向きな成長思考を手に入れた子どもは、困難に直面しても自分の背中を自分で押せる子どもになるからです。3歳くらいの子どものでも、後ろ向きな硬直思考を持つことがあるので、その子の考え方により働きかけを変えましょう。

	前向きな成長思考	後ろ向きな硬直思考
態度	学んだり、練習したりすることで自分が 成長することを楽しむ 。	できない子と比較し 、自分が優れていることを示そうと躍起になっている。
保護者や保育者、教職員からの言葉に対して	自分の成長を助けてくれる。失敗してもいいという 安心感を持っている 。	できる子、よい子でないと 嫌われる 。がっかりされるのではないかと 不安を抱えている 。
間違えたり、失敗したりしたとき	失敗の原因（間違ったやり方や練習不足）を考え、 次に生かす 。	やっぱりダメだったと落ち込む。 途中であきらめてしまう 。
新しいことに対して	チャレンジしたい。できなくても できるように努力する 。	失敗するのが怖いので、 チャレンジしない 。確実にできることだけをやる。
失敗や試練が多いと	最後までやり抜こうと、 さらに努力する 。	自分は ダメな人間だ 。何をやってもダメだと落ち込み、殻に閉じこもる。

ア 経過に注目する：チャレンジを促し、やる気になるポジティブシャワーをかける

私たちは子どもをほめるときに、「頭がいいね」「才能があるね」というように能力をほめてしまいがちです。実は、このようなほめ言葉はよくありません。なぜなら、子どもは失敗したときに、その原因を頭の悪さや才能のなさと思い込み、自分の出来の悪さが露呈するのを回避するために、失敗をしないようチャレンジすることをやめてしまうからです。また、一つも間違えなかったことをほめられると、間違える可能性のある難しい課題に取り組むことをやめてしまいますし、早くできることをほめられると、じっくり時間をかけて取り組むことを避けてしまいます。

ポイントは「経過に注目」した声かけをすることです。結果までには多くのステップがあり、その一つひとつの段階で前向きな声かけ（ポジティブシャワー）を行うことにより、ドーパミンを繰り返し放出するように促します。

例えば、「縄跳び連続 20 回」という目標を立てたとき、連続 20 回できるまで声をかけないということは、花が咲くまで水をやらないことと同じです。寒い中、縄跳びを持って外に出て 1 回でもやってみたとき「毎回よくがんばっているね」、連続 3 回跳べたときには「昨日より回数が増えたね」「縄跳びを回すスピードが速くなったね」などと声をかけることができます。そして、目標を達成したときには「毎日がんばったからできたね」「あきらめずに練習していたから 50 回も跳べるようになったね」などといった「経過に注目」した声かけをすることが必要です。

イ 未来に着目する：失敗を未来に生かすポジティブシャワーをかける

うまくいかなかったとき、失敗したときの声かけの仕方も重要です。「なぜできないの?」「前も間違えたよね」「他のみんなはできているよ」といった嫌味や責める言葉は好ましくありません。また、大人が子ども以上に落胆したり、失敗したことを叱りつけたりするのもよくありません。大人は鼓舞しているつもりでも、そのような言葉や態度は、子どものやる気と自信を奪っているだけなので注意しましょう。

失敗したとき、問題が生じたときは、「学びのチャンス」と捉え、ぜひ、子育てのスキルである Ask Say Do (アスク・セイ・ドゥ) を行ってみてください。保育者や教職員は子どもがどうすれば失敗しないかを知っていると思いますが、「言われた通りやりなさい」と指導していると、子どもは自分で考えて行動することができなくなり、非認知能力の「自主性」「積極性」「考える力」「問題解決能力」などを育てることができません。

失敗したとき、問題が生じたときは、まず、

- ① 「Ask : 聞く」: 「どうしたらうまくいくと思う?」「次はどうする?」と子どもに聞いてみます。
- ② 「Say : 言う」: 子どもにどうするか言わせます。その答えが間違っていると分かっている場合、否定しません。
- ③ 「Do : する」: 子どもが考えたことを、やらせてみます。

そしてうまくいかなければ、もう一度、Ask Say Do を行ってください。自分で考えたことがうまくいったとき、ドーパミンが前頭前野にたくさん放出され、そこにある「考える力」や「問題解決能力」を育てます。すぐによい結果が出なくても、待ちましょう。信じて待ってもらえた子どもは、自分の成長も待つことができ、自分を信じてがんばる力が育ちます。

子どもにとって大切なのは、失敗しても見守ってもらえる「大丈夫な環境」と、失敗を次に生かした「成功体験」です。大丈夫な環境で成功体験を積み重ねた子どもは、「自主性」や「考える力」といった非認知能力を向上させることができ、自立した柔軟性のある人間に育ちます。

ウ 物事を前向きにとらえる習慣をつける

物事はいろいろな角度で見ることができ、一見「悪い出来事」も、「最悪の事態を免れた出来事」であったり、「学びの機会」であったりします。保育者や教職員は、子どもに違う見方や前向きな見方を積極的に教えていきましょう。例えば、転んで手をついて服を汚してしまっても、そのおかげで頭を打たず、怪我をしなくてよかったと考えられます。また、今はうまくできなくても、伸びしろがいっぱいあり、できるようになる楽しみがあります。

性格も同じです。短所と捉えていることも見方を変えれば長所になります。「行動がゆっくりで遅い」ことも「慎重で丁寧」と言えますし、「落ち着きがなく多動だ」という特性も「好奇心が旺盛で活動的だ」という見方もできます。このように困りごとを前向きに捉える習慣をつけるよう働きかけましょう。

エ 前向きな成長思考のまとめ

子どもの困った行動に対して、「またやって！いい加減にして！」と腹が立つ場面を想像してみましょう。そんなとき、どんな考え方があるのか、次の例を見てください。

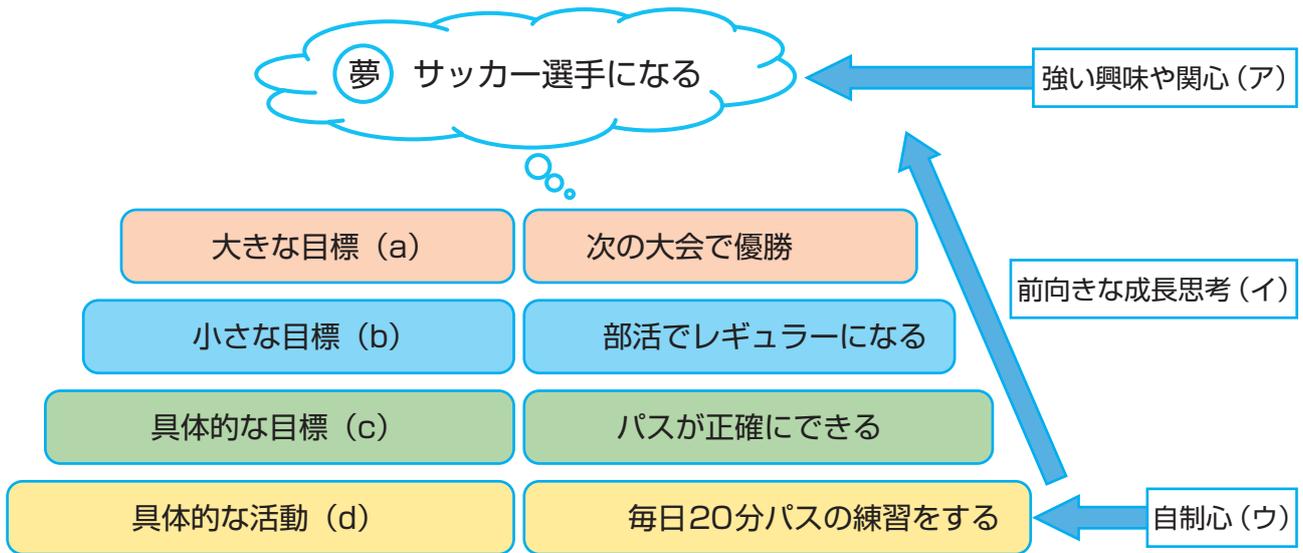
例：子どもが友達に対し、すぐ手を出してしまい、なかよく遊べない場合

後ろ向きな考え方	コミュニケーション能力が低い。落ち着きがない。
前向きな考え方	友達とかかわりたい気持ちはある。(よい側面) 以前よりは手が出る回数が減った。(前向きな評価)
成長する考え方	なかよく遊ぶにはどうしたらいいかな。(これからどうするか) 手を出してしまうのはなぜかな。気持ちを言葉にできるかな。

後ろ向きな考え方を前向きに変えて言葉にする。他人と比べるのではなく、その子の過去と比べて成長を評価する。そして、どうすればよいのかを子ども自身に考えさせ、うまくいくまで待つ。子どもにたくさんのポジティブシャワーをかけてドーパミンを放出させ、成長する喜びを教えることで非認知能力を育てましょう。

② 夢を実現するための非認知能力

やり抜くためのピラミッド



夢を実現するためには、さまざまな段階があります。上の「やり抜くためのピラミッド」に示したように、大きな目標 (a) を達成するためには、その前段階である小さな目標 (b) を達成しなければなりません。また、その小さな目標 (b) を達成するためには、具体的な目標 (c) を設定し、そのための具体的な活動 (d) を行うことが必要です。このように、子どもが大きな目標を達成するためには、段階を踏んだ活動を重ねることが大切です。

夢を実現するためのプロセスにおいては、簡単には手に入らない大きな夢を持つための「強い興味や関心 (ア)」、時に困難にぶつかりながらチャレンジを続け、失敗を学びに変えて歩み続けることができる「前向きな成長思考 (イ)」、そして、毎日またはある程度の期間、楽しいとは言い切れないことをコツコツと続ける「自制心 (ウ)」が十分育っていることが重要なのです。

ア 「強い興味や関心」

「(2) 非認知能力が育つための準備」のところでも、興味や関心を育てることは将来の目標に繋がり、夢をかなえる原動力になると述べました。子どもは好奇心を否定されたり、探求を制限されたりしなければ、自分が興味を持ったことには価値があると感じます。子どもの頃の興味や関心と、ここでいう夢とは直接関係ないかもしれませんが、子どもにとっては、それを肯定される体験こそが未来の夢の実現に向けた下地となるのです。

イ 「前向きな成長思考」

子どもの前向きな成長思考は、「経過に注目したポジティブシャワー」と「失敗を未来に生かすポジティブシャワー」、「物事を前向きにとらえる習慣」があれば育ちます。そうすれば、やる気や前に進む勇気を持ち続け、その子なりの挑戦を続けることができるでしょう。

ウ 「自制心」

自制心を育てるためには、保護者や保育者、教職員の機嫌や都合に左右されない「一貫した分かりやすい指導」が大事です。大人の言うことや対応が「いつも同じ」であることが、「ルールとは守るべきもの」というメッセージになります。また、大事なことは、子ども自身が自分でルールを決めたり、決められたルールに納得したりすることです。そうすることでルールに対する責任感が生まれ、強制的に従うことを求められるよりもルールを守りやすくなります。その上で、ルールを守ることでほめられたり、物事がうまくいく体験をしたりすると、脳内にドーパミンが放出され前頭前野の自制心だけでなく責任感も育ちます。

(5) 最後に

保護者や保育者、教職員が子どもに対し、「愛情」「関心」「前向きな注目」を十分に示すことで安定した愛着が形成され、それが非認知能力の土台となります。その土台から生まれる非認知能力の芽にたっぷりポジティブシャワーをかけ、折れない大木に育てましょう。しなやかで強い大木に育った子どもは、さまざまな変化に適応し、道がないところにも道をつくり出し、したたかに生きていくことができるでしょう。大切なことは「土台はいつでもつくり直すことができる」ということです。子どもが大きくなってからでも、保護者や保育者、教職員がその気になれば土台をつくり直し、ポジティブシャワーをかけ、子どもの未来を変えることが可能です。今日からスタート！一緒にがんばりましょう。

Dr. ひろみのハッピー子育てひろば

その1 [June①]

Dr.ひろみの

ハッピー子育てひろば



皆さん、こんにちは。香川大学医学部の鈴木です。神奈川県出身で3児（1男2女）の母です。14年前に香川にきましたが、すっかり気に入って一生いるつもりなので、どうぞよろしくお願いいたします。

☆プロフィール☆
鈴木 裕美（すずき ひろみ）
香川大学医学部 小児科専門医

これから毎月、保護者の皆様と一緒に子育てを考える「子育てひろば」をお届けします。お子様との関わり方についていろんなプランをお届けしますので、ぜひご家庭でもトライしてみましょう！

思春期前の子どもの心のドアは、親に向けて大きく開いています。

どの時期の子どもも、この3つを求めています。

- ① 愛情 「愛してほしい」
- ② 関心 「見てほしい」
- ③ 前向きな注目 「認めてほしい」

今回は1つ目の『愛情』です

優しい声で話しかけたり
笑顔を見せたり
抱きしめたり
添い寝したり
「大好き」と言ったり
おんぶにだっこしたり

おすすめなのが絵本を読んであげることです。テレビを消して、スマホをおいて、子どもの好きな絵本を1冊、ゆっくり読んであげてください。

☆小学校高学年になるのに、小さな弟や妹に嫉妬して、「抱っこしてもらってすらい」とか、「弟（妹）ばかり」と言って、ぐずぐずすねたり、ふてくされたりするということはありませんか？

わかってはいるけど、忙しくてイライラしている時はそんな姉や兄がかわいく思えないこともあるでしょう。それは当然の感情なんです。私もそんな経験があります。思春期に入ったら、心のドアをばたんと閉じて、自分のことをわかってくれないという「怒り」や「恨み」となって、様々な心身の症状を表します。

そうなる前に、ぜひ、弟や妹の2倍から3倍を目安に愛情を表現してください。心のコップがいっぱいになれば、弟や妹たちにも優しくできる余裕ができます。

今週のトライ

♡1日1回、愛情を示してみよう

- 帰宅した時に
- だんらんの時に
- 寝る前に

愛情を感じてリラックスすると自律神経が安定して、よく眠れますよ

「Dr. ひろみのハッピー子育てひろば」の電子データはこちら！

かがわの家庭教育



で検索してください！



2 「親子体幹遊び」のススメ ※「親子」とは、ここでは保護者と子どものことを意味します。

独立行政法人教職員支援機構 つくば中央研修センター長 清國祐二

(1) 「親子体幹遊び」の醍醐味

「親子体幹遊び」というタイトルに、みなさんはどのようなイメージを描いたでしょうか。「親子」という言葉から、「絆」や「ふれ合い」を感じた方がいらっしゃるかもしれません。「体幹」からは「すこやかな発育」や「運動能力の向上」を想像した方がいらっしゃるかもしれません。「遊び」からは子どもに不可欠な「見えない要素」や「豊かな想像力」を思い浮かべた方がいらっしゃるかもしれません。子どもにすくすく育てて欲しいという願いは、私たちに共通するものです。

このような言葉の組み合わせからできている「親子体幹遊び」は少々欲張りな「ねらい」を含んでいます。すべての子どもが愛情にあふれた家庭で豊かな時間を過ごすことができ、その後の社会を生き抜いていける基礎となる能力を身につけるきっかけとなりはしないだろうか。当たり前のことですが、それは保育所、こども園、幼稚園、小学校の努力のみで達成されるものではありません。子どもの向こうにいる保護者の力が不可欠です。その支援を一緒にやりませんか、というのがこの取組みの趣旨になります。



しかし、子育てとはあまりに日常であり過ぎて、大切なことがつい見過ごされがちです。また、どうしても保護者は子どもの「できないところ」に目が向きがちです。ほめたり認めたりする



よりも、つい叱ったり小言を言ったりしてしまうものです。そこに支援の手を差し伸べて、さまざまな「気づき」を届けようと考えています。親子の遊びやふれ合いを通して「愛着」や「信頼」の感情をはぐくみ、それを繰り返すことによって子どもの「自信」や「自立」の気持ちが育ち、外界に対する積極的な姿勢が芽生えることを期待しています。

子どもは「できなかったことが、ある日突然あるいは徐々にできるようになる」とても頼もしい存在です。今、できていなくても、いずれできるようになるものです。ただ、近年のように早くから保育所、こども園、幼稚園に預かってもら

う環境にあると、保護者の「知らない間に」できるようになっていることもしばしばではないでしょうか。「できるようになった瞬間」に立ち会うことができると、保護者は子どもをより愛おしく思え、子どもは誇らしげにますますがんばろうと思えるのではないのでしょうか。

そのような親子のかかわりのプロセスを意図的に仕組み、紹介するのが「親子体幹遊び」です。その中で保護者としての喜びやかかわりのコツを感じ取ってもらい、それを子育てのあらゆる場面で意識していただくことが大事になってきます。

(2) 「親子体幹遊び」を勧めるうえでのポイント

「親子体幹遊び」を保護者に勧めるうえで心がけたいポイントをお伝えしておきます。目の前にいる子どもがすべてですので、平均的な発達を引き合いに出したり、周りの子どもと比べたりすることは控えるよう伝えましょう。そのようなことは保護者にとっても子どもにとっても「百害あって一利なし」ですね。「子どもは一人ひとりその子に応じた成長を遂げていく」ということを改めて受け入れてもらうことが大切です。理想論のように伝わってしまうかもしれませんが、ありのままの子どもを受け入れ、成長に寄り添う意識になるだけでも、子どもは成長しやすくなるのですから。



次に、少しの時間をみつけて「親子で一緒に」取り組むことが肝要です。子どもは心から喜ぶはずですが、少しがんばれば手の届く目標を、子どもの意思を尊重しながら、親子で一緒に決めていくことがさらに重要です。「親子体幹遊び」で言えば、分かりやすい目標は秒数や回数になります。達成するには「集中力」や「忍耐力」そして「バランス」等が求められます。保護者が寄り添って、子どもに注目して、数などを数えながら励ますことが大切です。子どものがんばっている様子をできるだけ具体的にほめるようアドバイスするとよい

でしょう。目標を達成して「できた！」という瞬間は、保護者も子どももその喜びはひとしおです。

「親子体幹遊び」の成果や効果はどのようにして確かめられるのでしょうか。よく、子育ての秘訣に「ほめて育てることが大切！」と耳にします。ただ、どうやってほめるのがわが子に適しているのかまでは説明してくれません。「親子体幹遊び」に取り組むうちに、少しずつかもしれませんが、わが子の特徴とともに励まし方やほめ方のコツがつかめてくるでしょう。子どもにとっては自分のがんばり（ふざけず取り組むこと）が家族の喜びにつながることで実感できるでしょう。親子の間でこのような実感が持てれば、取り組んだ甲斐があったと思えるでしょう。

最後のポイントですが、保護者がポジティブ（肯定的で前向き）になることが大切です。わが子に対して「できないことが多い」と感じて、「できるようになる喜び」をほかの保護者よりも数多く体験できるわけです。それを楽しめる気持ちに切り替えていけると肩の力が抜けるはず。子どもの「できないこと」は決してマイナスではなく、親子の絆を深めることに大きく役立つのです。頭では理解してもらえますが、実際には保護者の心に余裕やゆとりがないとうまくいきません。少しの時間でもよいので、気持ちのモードを切り替えて、子どもの側に立って、一緒に過ごそうと意識できればいいですね。



（3）未来につながる「親子体幹遊び」

子どもの年齢が上がってくると、保護者としての悩みも膨らみます。メディアとの接触時間（ゲームやスマホ、タブレット等を扱う時間）が共通の悩みようです。親子で使用時間の約束をしても、なかなか守ってくれない現実に直面します。子どもに自制心や自己管理能力が備わっていないと、保護者のイライラは募るばかりです。

「親子体幹遊び」は、親子で立てた「目標」を達成することで、親子ともども心から喜べます。達成するために、がんばったり、集中したり、我慢したりしなければなりません。「がんばり」や「集中」、「我慢」は、自制心や自己管理能力の要素です。繰り返すことによって、自然に無理なく

身につくのです。

一方で、「約束」は守れないことで親子ともストレスがたまります。そもそも守れないことを前提に「約束」はつくられているかのようです。でもよく考えてみると、「目標」も「約束」も根っこは同じはずです。どちらも達成することに意味があり、そのことが自分だけではなく、他者

の喜びをも生み出すのですから。目標を達成する経験を多く持っている子どもほど、約束を守ることへの動機づけが大きくなることは容易に予想がつくのではないのでしょうか。



最後に、保護者の方へ伝えていただきたいことです。保護者の世代もスマホ等のメディアにふれている時間が長くなっています。「忙しい」と思いつつ、大切な隙間時間をメディアに費やしているのです。それを少しやりくりすれば、子どもとのかけがえのない時間を生み出すことはそう難しくないように思います。短時間であっても質の高い親子のふれ合いは、子どもの未来を豊かにする大切な「貯金」となります。子どもが成長するとふれ合い

方も変わってくるため、多くの子どもに共通して「できるようになる」幼児期や学童期は大きなチャンスです。子どもの未来は、保護者の子育ての未来でもあります。「子どもの頃もっと勉強しておけばよかった」という後悔の経験を持つ私たちです。「子どもが小さい頃にもっとかかわっておけばよかった」という後悔はしないよう、子育てに質の高い時間と手間をかけることの大切さを働きかけましょう。その手段として「親子体幹遊び」を加えていただけますと幸いです。



たっぷりスキンシップ親子体幹遊び

(清國祐二氏監修)

チャレンジ編 ① 姿勢のキープ

握力や腹筋が鍛えられ、我慢する力を育てます

- 1 タオルの高さを持ちやすいように握ります。
- 2 体をぎっこんぱつたと前後に揺らします。
- 3 体を斜めにして、その姿勢で我慢させましょう。

10秒我慢してみようねー
いち、に、さん、～

すごーい
よくできたねえ

60～90度

チャレンジ 斜めの姿勢が何秒続けられるか、一緒に目標をつくって挑戦してみるといいですね。

リラックス編 ① 脚上バランス

不安定な足の上でバランスをとる感覚を身につけます

- 1 手をしっかり持ってスネの上に立たせます。(子どもの体重でスネが痛いときは太ももの上でも構いません。)
- 2 手を離して何秒立っているか時間を計ります。
- 3 スネから太ももにかけて歩かせます。

ゆっくり! ゆっくり!!
集中しようねえー、その調子!

チャレンジ 親子で目標の時間を定めて、その達成に向けて頑張らしましょう。静かに集中する習慣が身につくといいですね。

ワイルド編 ① 斜め立ち

テンションを上げた状態から、ゆっくり集中カへ移行します

- 1 高い高い! 笑顔でテンション・アップ!
- 2 太ももに足を乗せ、いい姿勢を保たせます。
- 3 足を踏ん張り、体をしっかり伸ばさせます。

しっかり
踏ん張ってるねー
よし! 手を斜めに
くっつけて!!

チャレンジ 手を広げた姿勢で何秒耐えられるでしょうか。また後ろ向きで高い高いをすると、逆向きの姿勢となり、難易度が上がります。

リフレッシュ編 ① 一緒に前歩き

親子で同じ方向を見て、安定した時間と空間を楽しみます

- 1 準備体操程度に、子どもの肩を持って前歩きしましょう。
- 2 親の足の上に子どもを乗せましょう。前後左右に足の動きを描いて進みましょう。

いち、に、いち、に、
足を高く上げるよー、
大勢でー

ポイント バランスを崩しそうな足の動きもやってみましょう。

「たっぷりスキンシップ 親子体幹遊び」の電子データはこちら!

URL <https://www.pref.kagawa.lg.jp/documents/14861/taikan.pdf>



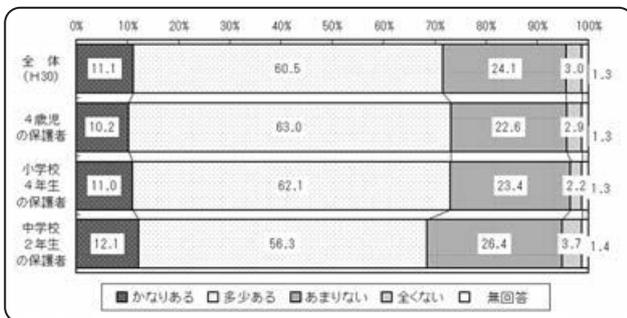
データからみえた子どもの非認知スキル

最近の調査からみえた、子どもの非認知スキルに関する傾向をまとめました。

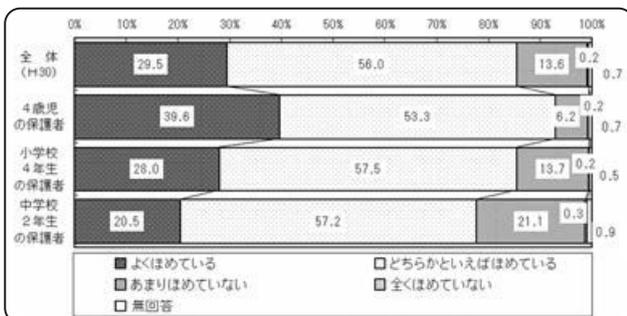
(1) 平成30年度 家庭教育状況調査結果より

家庭での教育についての悩みや不安の有無を聞いたところ、約7割の保護者が「かなりある」「多少ある」と答えています。また、子どものいいところやがんばりをほめる割合については、子どもの年齢が上がるにつれて減少しています。「ほめた時またその後、子どもにどのような変化がみられたか」という質問に対しては、「うれしい気持ちになった」「自信を持つようになった」など、子どもの前向きな変化を感じている保護者が多くみられました。

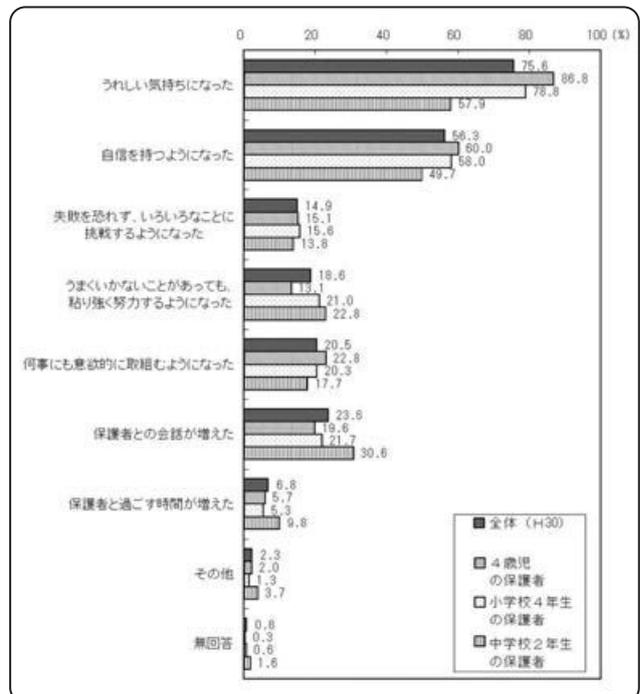
あなたは、家庭での教育（しつけ等）について、悩みや不安がありますか。



子どものいいところやがんばっていることをほめていますか。



「よくほめている」「どちらかといえばほめている」を選んだ方だけ、教えてください。ほめた時またその後、子どもにどのような変化がみられましたか。（複数回答可）

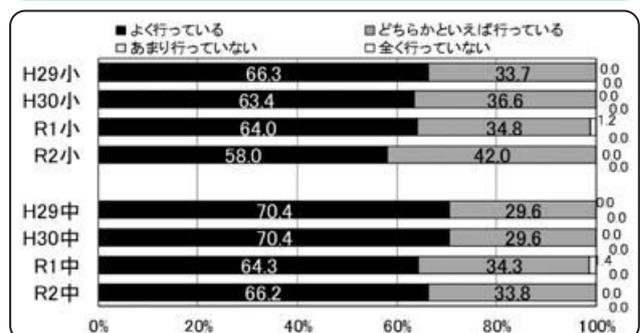


(2) 令和2年度 香川県学習状況調査結果より

「学校生活の中で、児童生徒の一人一人のよさを見付け、児童生徒や保護者に伝えるなど、積極的に評価していますか」という質問に対して「よく行っている」と回答した小・中学校の教員は、全体の約6～7割になっています。

学校生活の中で、子どもたちのよさを本人や保護者に積極的に伝える教員が、これまで以上に増えることで、非認知スキルのさらなる向上が期待できます。

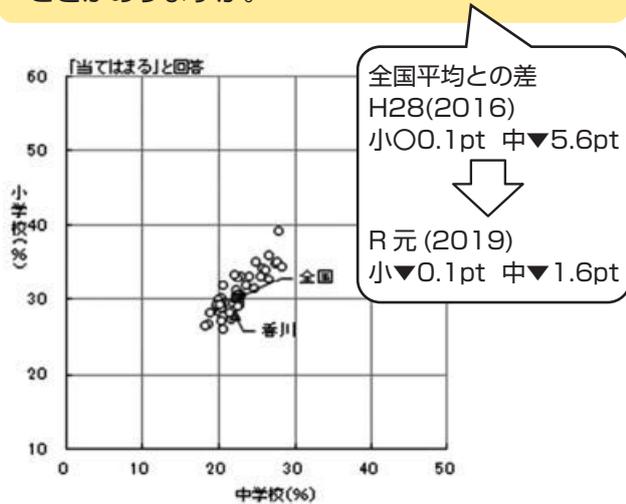
学校生活の中で、児童生徒一人一人のよさを見付け、児童生徒や保護者に伝えるなど、積極的に評価していますか。



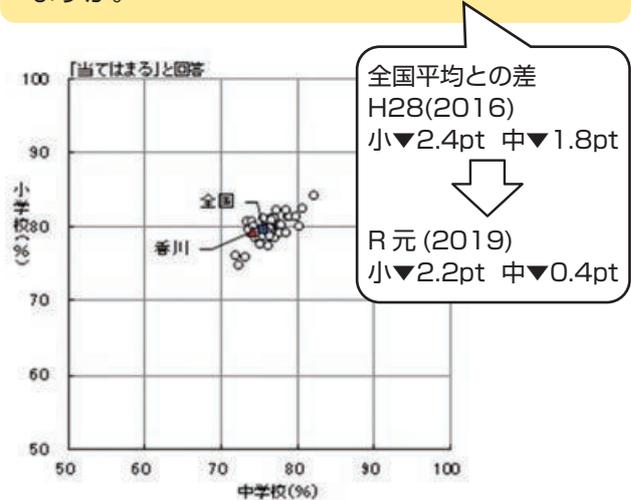


(3) 全国学力・学習状況調査結果より

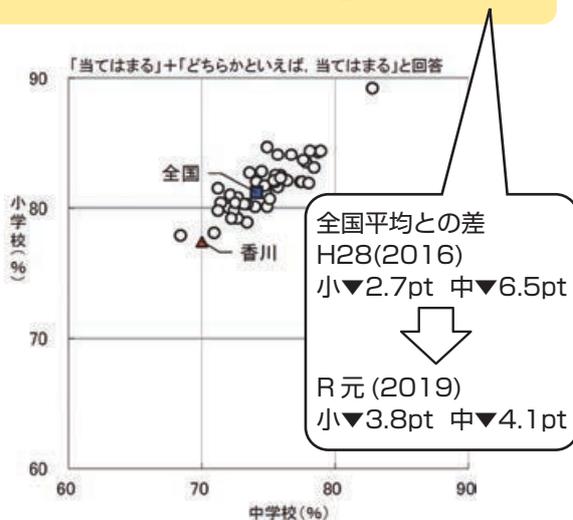
ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがありますか。



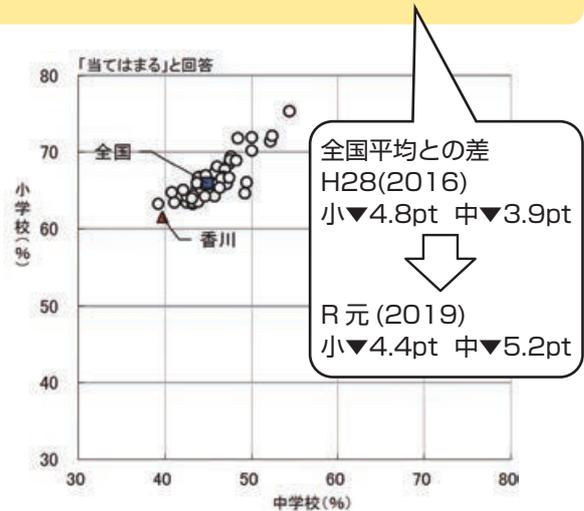
難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦していますか。



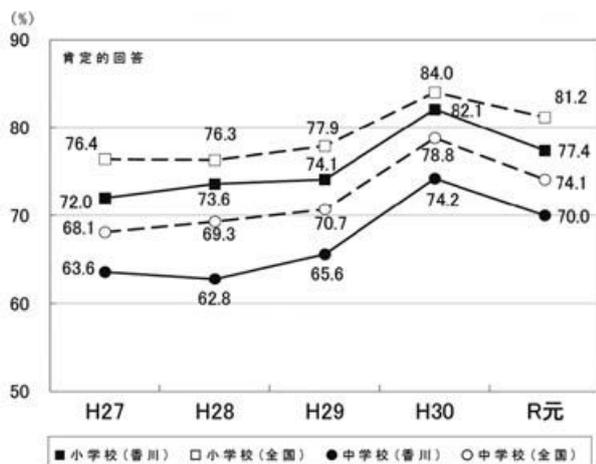
自分には、よいところがあると思いますか。



将来の夢や目標を持っていますか。



自分には、よいところがあると思いますか。
(経年変化)



「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことはありますか」「難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦していますか」「自分にはよいところがあると思いますか」「将来の夢や目標を持っていますか」という質問には、肯定的に答えた児童生徒の割合が全国平均を下回っています。この結果から、香川県の子どもたちは、挑戦心、達成感、自己有用感等が全国平均に比べて低い傾向にあることがうかがえます。

以上のことから、学校だけでなく、家庭や地域が一体となって子どもの非認知スキル向上のためのさまざまな取り組みを行うよう働きかけることが重要であると考えます。本書がその一助となれば幸いです。

◇非認知スキル向上事業（平成29年度～令和2年度）

学校と保護者や地域が連携し、さまざまな実践を通して子どもたちの非認知スキルを向上させることを目的とした事業。モデル園・校での取組みをもとに、効果的な実践プログラムを作成し、県内の幼稚園・認定こども園・保育所及び小学校に提供する。

◆ 講師

独立行政法人教職員支援機構 つくば中央研修センター長 清國祐二先生

香川大学医学部小児科 助教 鈴木裕美先生

香川大学地域連携・生涯学習センター 特命講師 神田亮先生

◆ モデル園・校

○平成29年度

高松市立檀紙幼稚園

高松市立一宮小学校 三豊市立桑山小学校

○平成30年度

高松市立一宮幼稚園 観音寺市立大野原幼稚園

三豊市立本山小学校 三豊市立比地大小学校

○平成31年度

高松市立檀紙幼稚園 丸亀市立城辰幼稚園

善通寺市立東部小学校 さぬき市立長尾小学校

〈参考・引用文献〉

* 文部科学省「幼稚園教育要領解説」平成30年3月

* 香川県 香川県教育委員会「香川県就学前教育振興指針」令和2年2月

* 香川県教育委員会「平成30年度 家庭教育状況調査 調査結果報告書」平成31年2月

* 香川県教育センター「令和元年度 全国学力・学習状況調査報告書」令和元年9月

* 香川県教育センター「令和2年度 香川県学習状況調査報告書」令和3年3月

令和3年3月

香川県教育委員会事務局

生涯学習・文化財課

〒760-8582

香川県高松市天神前6番1号

TEL：087-832-3774 FAX：087-831-1912